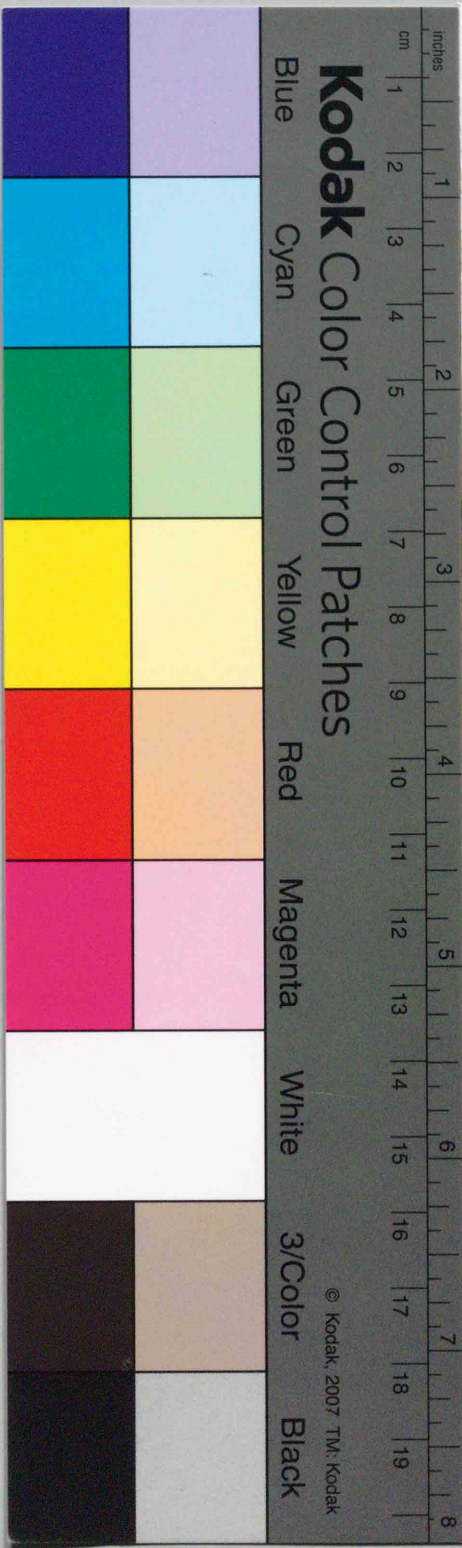
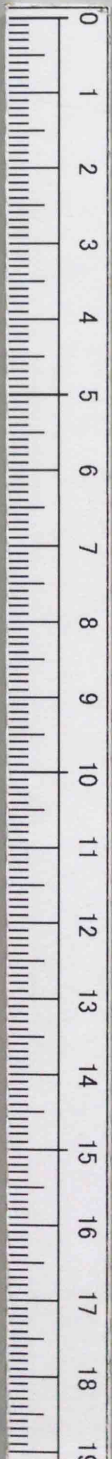




3759  
Fu10  
資料室

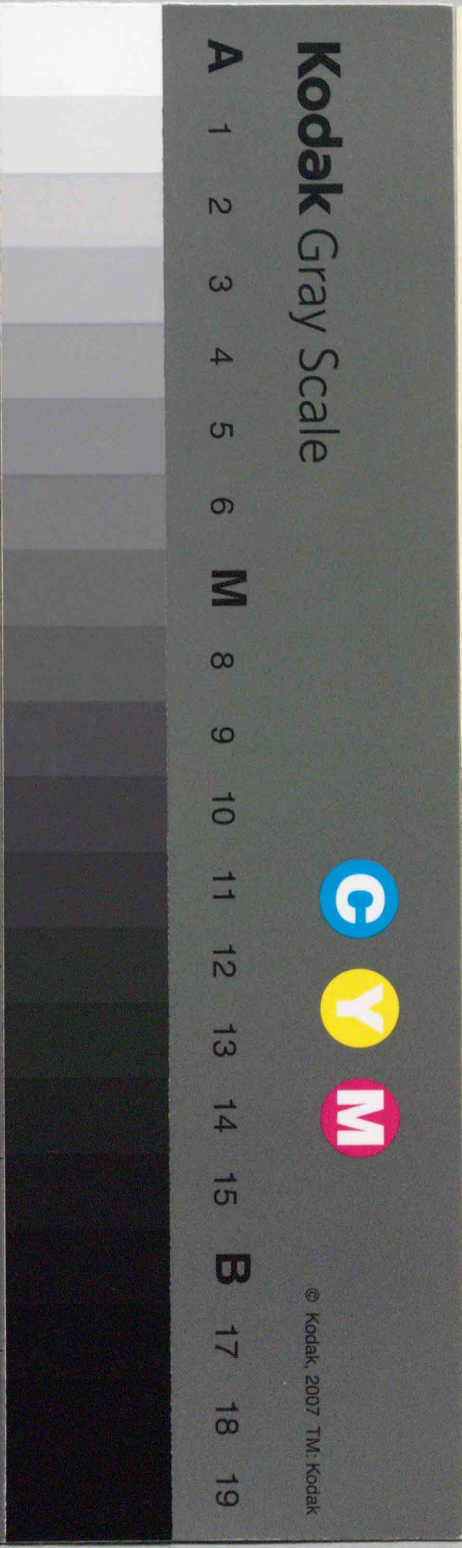
大正讀本



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM, Kodak



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM, Kodak

41413

教科書文庫

4
810
41-1913
20000 43504



資料室

375.9  
Fu10

大正二年一月二十四日  
 文部省檢定  
 中學國語教科書

藤村作編

大正讀本

發兌大日本圖書株式會社



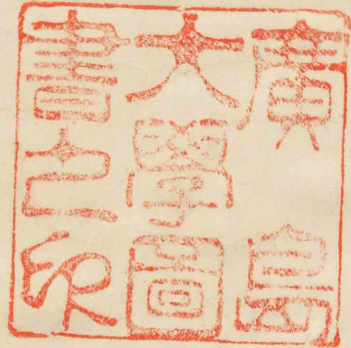
生徒諸子へ

- 一 各文章の末には、作者の名又は本文を採つた書の名を記してある。併し中學校各學年の程度に合はせる爲に、原文に手を入れたものは、某書に據るとした。
- 一 上の段に抜出した語句は、尋常小學讀本にもなく、又本書にもそれまで出ないもの。其のうち――を附けた漢字は既に習つたもの。
- 一 漢字の下に( )に包まれたものは、字書で其の字を引く時の見出し。
- 一 語尾の變化する語は、自習の便利の爲に辭書に出て居る形を出した。
- 一 \* を附けたものは卷末に説明してある語句。
- 一 卷末説明つきの語句は、すべて五十音順に並べてある。

大正元年十月

編者

生徒諸子へ





# 大正讀本 卷一目次

一	入學……………	一頁
二	入學を舊師に報ずる文……………	六
三	國引……………	七
四	水國の春……………	一〇
五	春の曲……………	一五
六	ウイルヘルム、テル……………	一七
七	深澤の躑躅……………	二四
八	アレクサンドル大王……………	三〇
九	スワロフの勇戦……………	三八

一〇	スワロフの勇戦……………	四三
一一	廣瀬中佐……………	四七
一二	松平信綱の幼時……………	五一
一三	阿部忠秋と松平信綱……………	五五
一四	鱧釣……………	五六
一五	鱧釣……………	六二
一六	テセウスの剛勇……………	六八
一七	テセウスの剛勇……………	七四
一八	夏休……………	七九
一九	猫の作戦計畫……………	八一
二〇	小笠原島なる友の許へ……………	八九



二一 労働の神聖……………九一

二二 富士登山……………九四

二三 富士登山……………一〇〇

二四 小話三章……………一〇五

二五 六書……………一一〇

二六 奮戦後の赤城を訪ふ……………一一五

二七 笑話四則……………一二二

(目次終)



大正讀本 卷一

藤村 作編

一 入學

膝下

余は中學一年生なり。父母の膝下に居て小學校に通ひし折は、思ふまゝの事して暮らししが、小學を卒業し、やがて中學に入ると共に、なつかしき父母の家を離れて寄宿舎に起臥する身とはなりぬ。

思へば小學卒業の一月程前の事なりき。父は余に向つて、「汝いよく小學を卒業せば、かねての望に任



夢(夕)

躍る、嬉し

せて中學に入らしめん。必ず一層奮發して勉強すべきぞ。」といと嚴にのたまひき。あゝ中學校、これ幾度か余が夢に入りし處ならずや。されば余は父の言葉を聞きて躍り立つばかり嬉しくも思ひしが、又さならん時は、此の最愛の家を離れて、知らぬ他郷の寄宿舎に入らざるべからざるを思ひて、何となく悲しくもありき。

試験  
迫る

三月の卒業は成績優等なりき。やうく一息つく間もなく、中學の入學試験は眼前に迫れり。人傳に聞けば、志願者は定員の約三倍に達したりといふ。不覺を取らば一身の不名譽、母校の名折れと、心づか

一所懸命  
こそしむ

伴なふ

ひは一通りならぬば、一所懸命にその準備にいそしみぬ。

いよく試験の當日とはなりぬ。伴なひ來給ひし父に心づけられて、筆紙墨等残る所なく整へて校門を潜りぬ。わが小學校の幾倍あるかと思はる、敷地の廣さ、嘗て見し事なき校舎の壯大、あゝ如何にもして、この學校の生徒と呼べる、身とならばやと心に念じぬ。

愈

入學試験も終りぬ。胸を躍らしたる成績發表の日も嬉しく過ぎぬ。斯くて余は愈、寄宿舎に入れるなり。初の程は知らぬ人ばかりにして、互に物いふこ



淋し

いたく  
薄志

慣る

とも稀なれば、心の淋しさ胸に物のつかへし心ちして、唯切りに家のみこひしく、舊友のみなつかしきに、課業は小學校よりは甚しく困難に、同級生はいづれも學力余より優れる様に思はれて、教室に出づるも樂しからざりき。父へはさすがにいひかねて、或日母へ苦しき思の數々を言ひ送りしに、日頃の優しきに似ず、いたく余が薄志弱行を責め給へる母の書簡をうけて、密に泣きし事もありき。されど、不思議にも十日二十日と日を重ぬるにつけて、學課には慣れ、友には親しみ、運動場はおもしろく、散歩は楽しく、萬事慣るゝに従ひ、嘗て及ばずと思ひ

秩序

愉快

輝(ま)く

し同級生も、皆優れたる人のみにもあらず思はれ、勉強せば余とて之を凌ぐを得べしといふ自信も起り、不快に思ひし人々も、親しく交れば小學の舊友と異なる所なく、寄宿舎生活も、秩序の整然たるがいたく愉快に感ぜらるゝに至りぬ。斯くて日數積るに従ひ、學課はいよゝゝ興味を増し、學友の親しみは益加り、前途の希望は輝き出で、何時となく家を思ふことも稀になりぬ。今や余は勤勉の愉快を解する人となり、教室に、自習室に、運動場に、全心全力を擧げて事を勤むる事の何よりも楽しくなりぬ。暑中休暇も程近し。始めて



家にかへらん日、父母余を見て何とかのたまはん。  
余は今より指折りてその日の來るを待つなり。

二 入學を舊師に報ずる文

拜啓小生の中學校入學に就いては一方ならぬ御配慮にあづかり候ひしが選抜試験の結果本日發表せられ幸に合格いたし候御安心なし下されたく候本年の志願者は定員の三倍もこれありと承り試験の結果如何あらんと危ぶみ居り候ひしが望外の好成績を得十五番にて合格者の列に入ることを得候事全く先生日頃の御教訓御指導の賜と感謝に堪へず

望外

堪ふ

落膽

慰藉

會稽の恥

祈る

候わが校よりの志願者十二名中十名合格致し候甲君の失敗は一同の意外とする所にて候多少落膽の様子に候ひしが同窓の慰藉激勵に感じて來年は是非會稽の恥を雪ぐとて勇んで歸郷致され候先づは取りあへずこれのみきこえ上げ候何卒今後とても從前の如く御指導を賜はり度ひとへに願ひ上げ候時下御自愛のほど祈り上げ候敬白

三 國引

伊弉諾尊・伊弉册尊がお生みになつた日本は、初の程は小さくて足りない處が多かつたのを、子孫の神々



修理  
立派

がだんだんに修理を加へ給ひて、今の様な立派な國となつたのである。

出雲の國は取分け小さかつた。極幅が狭くて帶の様であつた。素戔嗚尊すさのおのみことの四世の孫に、臣角命おみつのみことといふ方が、「いかにも是では狭過ぎる。ちと縫足さなければいけない。」と思召し立たれた。

そこで、海岸の巖の上に立つて、「何處にか『國の餘り』は無いか。」と、遙とほに西の方を御覽になると、漫々たる大海を隔てて彼方に新羅しらの國が見える。

おゝ、ある。新羅の岬に「國の餘り」がある。あれを引寄せて此の國に縫合はせよう。

巖  
遙、漫々

綱

繋ぐ

と、臣角命は神通力をあらはして、其の新羅の國の出鼻を、ずばりと切分けて、さて三撚みつぢの大綱を打掛けて、其の國の片に結びつけ、えいやくと手ぐり寄せ、そろりくと引寄せて、「國來い、此處まで來い。」と、うくと引きつけて縫合はされたのが、古津ふるつから杵築きつきの岬の邊である。此の時國引の綱を繋ぎ止めた杖つゑが、即ち今の三瓶山さんびんといふ山。又其の綱は菌きのの長濱ながはまになつて居るのである。

まだこれでも出雲の國が小さいので、此度は北の方に「國の餘り」は無いかと御覽になると、滿洲の方に大分広い處が見えた。早速其處を切分けて、又もや三



燃の綱打掛けて、國來い、此處へ來い。と引寄せて接合はされたのが、今の秋鹿郡あたりになつた。「今少し足さう。」と言つて、東北の方を探して其の「國の餘り」を引寄せ、とう／＼、今日の出雲國がすつかり出來上つたのである。

神代より幾千萬年を経て、明治四十三年になつて、彼のちぎり残りの朝鮮の全部が、遂に悉く我が日本に引かれて仕舞ふことになつた。

(日本古事記 神代卷)

#### 四 水國の春

悉

籠む

いでんずる

逍遙

猶

濁る

水國の春を見んとて、某の年四月二日、逗子の住居を立ち、東京に出で、上野より汽車に乗りて、土浦に下る。時は午後の四時過ぎなり。陰雲筑波山を籠めて、今にも降り出でんずる氣色なり。去年、日光鹽原に秋色を探りし歸るさの宿に今日も投じつ。暮るゝに少し間もあれば、出でて櫻川のほとりを逍遙す。霞が浦へは猶二三町もあれば水は見えねど、枯田の末に白帆の移り行くが見えたり。春色猶淺くして、櫻川の濁れる水に影うつす柳もいまだ青まざ。川に沿うて四つ手綱多くかゝれり。小屋は皆水に柱して立ち、岸より一枚板を渡して橋とし、漁人は小屋

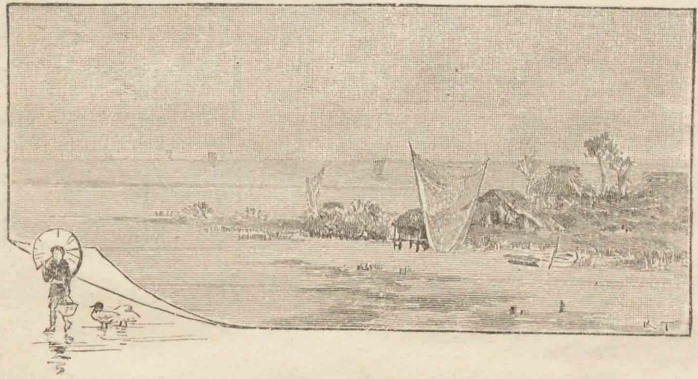


捲く

鉢盆辨當

に居ながら、網を捲上ぐ。とある小屋に入りて、漁夫

とさまぐの物語す。小屋の中は半疊敷ほどなり。席の上に座蒲團を敷き、右手の棚に辨當箱、角燈、酒德利、座右に煙草盆、茶瓶、小さき火鉢を置けり。唯、前面の一方のみ開きて、マッチ箱に入りたる様なり。十分おき位に、漁夫きりりと網を捲き始むれば、X字形をなせる四つ手の竹次第に水を出でて、や



魚蝦

柄

たそがれ

傘

がて網見え、やがて四十度に起き、網の目より水たらたらと玉を散らし、銀色の魚蝦ほろくまろびて網の底に集る。漁夫乃ち座右にかけし長柄のさでもてすくひあげて、生簀の籃に投ず。鮒たなご三四百目程のさい、などありき。

小屋を出づれば、たそがれ近き空どんより暗くなりて、小雨はらくくと落ち來ぬ。櫻川の水さながら油の様によどみて、岸の柳の影もおぼろになりぬ。傘をかざして堤に立てば、暮雨煙の如く、とほき山、ちかき四つ手網、そここのなづな程なる獨樹、皆とけて消えなんとす。夕鳥の聲だにせず。傘一つ向うの



燕村

田中を行く。  
宿に歸りて、春雨のしめやかなるを聞きつゝ、今日東京にて求めし燕村集讀む程に、何時しか眠に入りぬ。

(徳富蘆花)



五 春の曲

うてや鼓の 春の曲、  
雪よりもはゝ 冬の日の  
悲しき夢は とざさきて、  
世の春の日と かをりけり。



こぞめ

ひけばまぞめの

春 霞

かすみの幕枝

ひきぎちて

花と花とを

縫ぬ絲は

萌ゆ

々さ萌え出でし

青なふぎ

霞のまぐを

引き向けて

春をうりふ

ことかりれ

花咲ねにふ

かげをこぼ

うてな

春のうてふと

ひふべけれ

小蝶と花に

よはふれて

酔ふ

優しき夢を

よては舞ひ

酔うて羽袖も

むらくと

春の姿を

まひねらし

(島崎藤村)



六

ウイルヘルム、テル

芝居 評判

日本の芝居で「忠臣藏」が最も名高く、また最も評判されるやうに、獨逸の芝居では「ウイルヘルム、テル」が最も有名に、又最も好評を得て居る。



夙 口碑 演ず 書割 竿 槍

この芝居は、獨逸文學の大家として、我が國にも夙に知られて居る彼のシルレルが、中古に於ける瑞西の口碑を原とし、是に獨立戰爭を加味して、巧みに作つた物であるが、中にも最も看客の眼をひくのは、その三幕目に演ぜられる「アルトルフの牧場の場」即ち「林檎射撃の段」であらう。舞臺は二三本の樹木を中心にして、後は青々とした牧場から、雪を殘した高山の頂を見せた書割。樹木の邊には、王冠を懸けた長い竿を立て、その下には番卒二名が槍を持つて護衛して居る。これは、此の邊を通行する者に必ず王冠を拜せしめて、奧太利皇帝

云ふ

獵師

侵略



の威光を示さうと云ふ代官ゲスレルの小細工である。此處へ、テルは獵師の姿で、その子ワルテルの手を引きながら、何氣なく來掛るが、元より自由を好む男であるから、この頃暴威を以て侵略して居た皇帝の政治には、何で素直に従はう、そのま



答じ 衝突 騒ぐ 恰 憎む 射術 載(車)す 免す 難題

、禮拜もせずに通らうとする。番卒は是を見咎める。彼此押問答の末、此の場に來合はせた村の人々と番卒等との衝突となり、舞臺は一時騒がしくなる。所へ恰も大勢の家來を連れて來かゝるのは、例の代官ゲスレルであるが、テルは豫て代官の憎む所であるから、その射術に巧みなのに乗じて、ゲスレルは、ワルテルの頭上に手づから一箇の林檎を載せ、「これを見事射て落すなら、其の方の罪は免してつかはさう」と意地の悪い難題を出す。

現在我が子の頭上の林檎に、親として弓矢を向けると云ふことが、人間に出来る事であらうか。まして

脱(肉)る 飽く 而 腕 促す

や、テルはその國を愛し、また自由を愛すると同じく、その子をも深く愛して居るのである。されば、流石剛氣の男も涙ながらにわびて、この難題を脱れようとするが、飽くまで残忍なるゲスレルは、いつかなこれを聽かばこそ。ますく、テルを強ひて、「どうしても射て見せよ」と迫り、その心を苦しめて、而も自ら樂しむのである。然るに、健氣なワルテルは、深く父の腕を信じて居るから、少しもこの難題に驚かず、却つて父を勵まして、「はやく射て下さい」と促す。テルは遂に心を決した。弓を取直して立上つた。



尤も

怪我

眩めく

尤も心中には神を念じて、萬一頭上の林檎を射損じ、我が子に怪我でもさせたなら、二の矢にゲスレルを射殺してくれると、已にその用意までした。手は戦き、目は眩めく。その中から、テルは思ひ切つて矢を放した。

汗

蘇生  
想

天の恵か、はた手練か。その矢は見事林檎を射落し、我が子ワルテルにはかすり傷さへ附かぬ。今まで手に汗を握つて居た看客は、此の時思はず胸を撫でて、始めて蘇生の想をする。

然るに何事ぞ、ゲスレルは目敏くも、先にテルの用意した二の矢を見咎めて、更にその罪を鳴らし、家來共

腰、只  
寂

與す

斃す

にテルをからめさせて、其の場からひつ立てて行く。人々は無念の切齒をするが、多勢に無勢で如何ともしがたい。

テルは覺悟を極めて、ひつ立てられる。ワルテルは追うて、その腰に取付く。満場只寂として、聞えるものは涙をすゝる聲ばかり。

かくして、テルは残忍なゲスレルに捕へられ、遂に命を取られるであらうか。否。天は素より義人に與するものである。神は何で悪漢を助けよう。見よ。次の幕では、テルは暴風雨に乗じて、湖上の船で身を免れ、更にゲスレルを路に要して、遂にこれを斃すの



である。  
先に林檎を我が子の頭上から射落した彼の弓は、今や暴悪なる代官を見事その馬上から射て落す。斯くして、テルは我が子の命、自身の命と共に、瑞西國民の命をも救つた。

今日でも、瑞西に生れた者に、ナポレオンの名は知らずとも、テルの名を知らぬ者は無いと云ふのも、無理ならぬ事ではないか。

(巖谷小波)

七 深澤の躑躅

疾驅

馬返しを過ぎて疾驅深澤の深谷に入る。

寓

蕭條

哀(口)

一 去年の秋此の地に遊びて、深澤劔が峰の紅葉の美に驚き、天下未だ曾てかゝる勝に接せず。と言ひしに、わが寓せし照尊院の主僧は、當時我に説きて曰く、然り、日光山紅葉の美、まことに天下に冠たるものなるべし。されど秋の山には、蕭條の氣其處となくみちみちて、遊ぶ人をして坐に悲哀の感に堪へざらしむるものあり。さればわが日光山、四季の中最も遊興に適するものは、春に若くなし。五月より六月中旬に及ぶまでの晩春の候に若くなし。まして八しほの躑躅は到る處に咲きみだれて、その美決して紅葉の下にあるものにあらざるをや。あゝ、その躑躅の



裾模様

夢寐

ゆくりなし

花の美、世人未だ多くこれを知らず。されどその美しき事は、殆ど言葉には盡し難かるべし。先づ思ひても見給へ、その頃には、わが前山よりかけて湯本の山の奥まで、一面に美しき裾模様をおきたる如くなるものをと。われは此の言を聞きてより、夢寐その景を思ひてやまざりしが、今年ゆくりなく此處に遊びて、躑躅の花の奇觀を見るを得たり。川原に突出したる大石の一角をむかうに曲れる時、われ等は思はず知らず足をとどめたりしが、しばしは見とれて、口を開かんともせざりき。その高さ大凡千五百尺にも越えつべき、しかも材木

蔽ふ  
深碧  
反映

濕す

を重ねたるが如く突立ちたる岩山の一面は、全く薄桃色の躑躅の花を以て蔽はれたるが、空の深碧と若葉の新緑とに反映したるさまのうつくしさ。あゝ、われこれ何を何とか言はん。右は劔が峰の岩山より、下の下の、今崩れんかと思はるゝ絶壁に至る間、左は華嚴の末流の流れ來れる山奥よりかけて、芝草の美しく生ひたる堤のごとき山鬼の怒れるがごとき岩、猶その下の、水のしぶきの衣を濕すあたりまで、處として躑躅の花ならざるはなし。その下には怪巖、奇石、群をなし、列を作りて、或は小、或



惡魔

奔流  
觸る

響

逢ふ

柴

ほとく

被さる

は大、或は馬の互に相争ふが如く、或は惡魔の疾走するが如く、或は龍の如く、或は虎の如く、その様名狀すべからず。その間を、深碧染むるが如き一道の水は奔流し來りて、先づ絶壁の一角に觸れ、殆ど深谷も崩るゝばかりの響をなし、更に折れて小岩、小石の間を流るゝこと少許、再び大岩、怪石に逢ひて、その亂るゝこと前よりも甚し。水のあがること一間餘、水珠の飛ぶこと數十尺、傍なる石より石に架けたる柴の組橋も、ほとく流されんかと疑はる。その組橋の上には、躑躅に蔽ひ被さるやうに突出てたる絶壁の上には、躑躅の花最も多くして、その色の鮮なる、他の比にあらず。

水は再び静まりて、その絶壁の下を洗ひ、更に又激し、更に又静まりて、遂に深澤の深谷の間を永久に出でて行く。

磊々  
俯す  
溪流

昨年の大水に新道は崩れて、通ふべくもあらざれば、われ等は川原の中につけられたる、大石の磊々たる舊道をたどりぬ。柴の組橋をわたること三たび、石より石に傳ひくゝて、やうやく水をわたること二たび、しかも橋を渡る度毎に、仰いで山上の躑躅を見、俯して溪流の白雪をうかぶ。かくて、やうやくにして深澤の深谷を過ぎ盡しぬ。顧みれば八しほの色燃ゆるが如し。

(田山花袋)



八 アレクサンドル大王

世界の英雄といへば、私どもは先づアレクサンドル大王を想ひ起すのが通例であります。大王はマケドニア王フィリポの子で、紀元前三百五十六年に生れ、十八九歳の時既に戦功をあらはし、二十一歳で王位に登り、三十四歳で死ぬるまで、東方諸國を伐從へ、僅か十三年間に、世界に類のない大國を建てた英雄であります。

活潑  
狩獵  
駢足

大王は、幼時より活潑で、大膽で、擊劍、狩獵等を好み、駢足が疾く、殊に馬術が上手でありました。或時父王

登る

駿馬

悍馬

フィリポの許に、駿馬を賣りに來た者がありました。「どんな馬か、一つ試して見よう。」と馬場へ引出して、父王の侍臣達が乗つて見ましたが、非常の悍馬で、誰も之を乗りこなすことが出来ません。それで父王は「こんなものは役に立たん。」といつて、返さうとします。先程から、傍で此の有様をぢつと見てゐたアレクサンドルは、

「こんな良い馬を、乗りこなすことの出来ない爲に失ふのは残念だ。」

といひました。父王は、初は此の言葉を氣にも留めず、にゐましたが、度々繰返していふので、

繰る



明瞭

どうして御前はそんなことをいふのか。大人さへ乗れないのに、御前が乗れると思ふのか。

と問ひますと、アレクサンドルは、

はい、私はあの人達よりは、よく此の馬を扱ふことが出来ます。

と明瞭に答へました。父王が重ねて、

お、さうか。きつとさうか。それでは御前乗つて見るがよい。

といひましたので、

はい、乗つて見ませう。

と、直ちに準備に取掛りました。人々は、アレクサン

叩く  
鞭  
穩

ドルが小さいくせに、生意氣なことをいふと思つて、笑つて居ました。

アレクサンドルは馬の傍に進んで、先づ手綱を取り、馬の首を太陽の方へ向け變へました。これは、先刻から、馬が自分の影に驚き騒ぐのに氣が附いて居たからであります。

それから、馬を少し前の方へ引き、少しでも荒れさうになると、首を叩いてなだめて置いて、やがて、ひらりとばかり飛乗りました。そして、次第々々に、靜かに手綱を引きしめて、鞭をあてたり、勵ましたりせず、穩かに馬をあしらひました。



漸

かくすること少時、漸く馬が従順になり、今は唯驅け出した。一心になつて居るのを見て取つたから、アレクサンドルは掛聲諸共に、疾風の如く驅けさせました。

凝らす

悠々  
喝采

父王や、侍臣達は、どうなる事かと息を凝らして見て居ましたが、アレクサンドルが馬場を一廻り乗りまはし、悠々と馬を下りるのを見て、一同その馬術の巧みなのに感じ、喝采の聲は少時鳴りも止みません。父王は喜の餘り、涙を流して、彼を抱き上げたといふことでもあります。

此の世界の大英雄は、世界の大學者<sup>\*</sup>アリストテレス

枕

を師として、道德、政治、文學の事から、醫學の事に至るまで、その教を受けましたが、元來學問が大好きなので、著しい進歩をしました。殊に、ホメロスといふ大詩人の書いた古代の英雄物語を愛讀して、枕邊には常に短刀と此の物語とを置き、武士道の精神を養ふには、これほど貴いものはない。といつてゐたさうであります。又、師アリストテレスを父の如く敬愛して、常に「我に生命を與へたものは我が父である。我を善くしたものは我が師である。」といつて、師恩の大きなことを感謝してゐたさうであります。當時、マケドニアといへば、最も強く榮えてゐた國で



情弱

ありました。アレクサンドルが此の國の王子に生れながら、普通の富貴の子弟のやうに、情弱・暗愚なものにならなかつたのは、全く、彼の志が高く、大きかつたからであります。

奢侈

嫌

克己、艱難

大王は、父王の權威を笠に著、又、奢侈・安逸な生活をすることとは、大嫌でありました。幼い時から、肉體の快樂を節制する克己の美德を持ち、又、艱難・辛苦と闘つても大功名を立てようといふ、燃ゆるが如き大望を抱いてゐました。

父王フィリポが、他國を征服したり、強敵に勝つたりした報知が来る毎に、アレクサンドルは子供心に喜

偉い

繼ぐ

ぶと思ひの外、悲しんだといふことであります。それは、父王にまづ世界を征服せられてしまつては、自分の大功名を立てる餘地がなくなることを憂へたのであります。父が如何ほど大事業をなしても、その子が、それ以上の大事業をすることの出來ない道理は、ありませんが、大王が父王の如き偉い人の後を繼いで、富貴の樂しみを極めようとせず、もつと亂れた争のある國を引受けて、大智勇をあらはし、大功名を立てて見たいといふ遠大の志を抱いて居た事は、この一事を見てもよくわかります。實に、大王はその志の通り父王の大事業の後を承繼いで、猶それ以



上の大事業を成したのであります。

(少年鑑に據る)

九 スワロフの勇戦

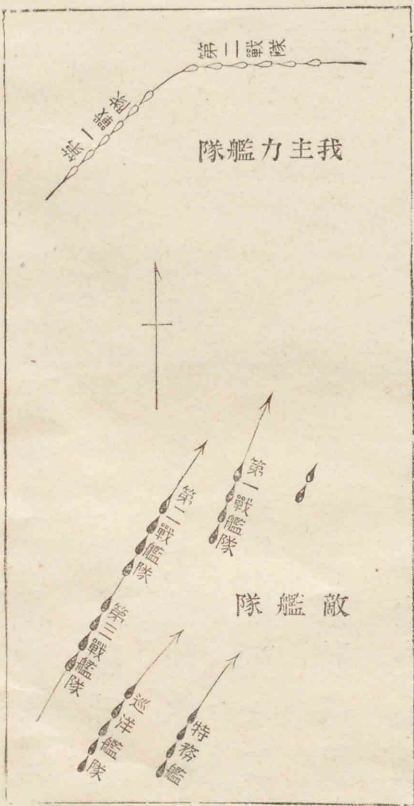
千古未曾有

明治三十八年五月二十七日、我が聯合艦隊が、露國バ  
ルチック艦隊を破つて、千古未曾有の大勝を博した  
る日本海大海戦は、史上稀に見る大激戦なり。敵は  
此の戦に於て其の全艦隊を失ひ、主將虜となるに至  
りぬ。

悲惨

敵艦隊中、最も壯烈悲惨なる最期を遂げたるものは、  
司令長官ロジエストウエンスキー中將の旗艦とし  
て、艦隊の先頭に在りし戦艦スワロフなり。開戦の

右舷  
装甲版  
巨(王)



後幾もなく、我が主力艦隊より發ちし十二吋砲彈そ  
の右舷を撃ちて、装甲版を貫き、内方防禦部に設けら  
れたる假綑帶所に入りて爆裂し、尋いで又、一巨彈後

部司令塔に  
命中して、附  
近に在りし  
十餘名を一  
時に斃し、他  
の一彈は艦

尾士官室に爆裂して、大火災を起しぬ。  
やがて、戦鬪漸く激烈となるに隨ひ、我が砲彈の命中



蜂の巢

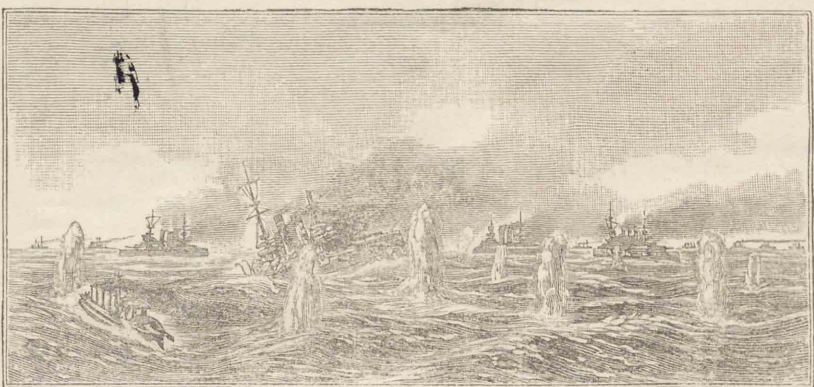
碎く

忙殺

伏屍

累々

濛々



爆發するもの引きも切らず。舷側は蜂の巢の如く貫かれて、海水艦内に侵入し、甲板はさゝらの如く碎けて、火災各處に起り、將士は防水・防火に忙殺せられ、死傷は刻々に増加して、伏屍累々の慘狀を呈しぬ。而も砲員は濛々たる煙の裡に立ち、自若として戦闘を繼續して、少しも其の砲火をゆるめず。折しも我が一弾は後部砲塔に命中

僚艦

霰

して、之を爆破し、爲に一門の十二吋砲は廢砲となり、一門はその根元より折れて、數千貫の砲身は舷外遠く吹飛ばされつ。午後二時五十分頃、また一發の我が十二吋砲彈、前部司令塔を撃つて爆裂するや、塔内の操舵機は忽ち故障を生じ、艦は自ら右方に轉じて、列外に走りぬ。かくて僚艦と別れたるスワロフは、兩舷機を加減して、僅かに艦を操縦しつゝ、單獨北方に進航せしが、久しからずして再び我が主力艦隊の包圍する所となりぬ。十二隻の我が軍艦より發つ彈丸は、雨の如く、霰の如し。三時三十分頃に至り、一發の巨彈は前檣



轟然

副  
慘  
地獄

の根元に中りて破裂し、周圍一丈五尺、高さ百尺に餘る鐵樁は、轟然舷側を打破りて、眞倒に海中に倒れた。尋いで大樁も亦其の上半部を折斷せられ、直径十尺の二箇の大煙突も、亦見る間に打碎かれて形をも留めず。前後の艦橋は或は碎け、或は焼けて、唯僅かに鐵骨の一部を残すのみ。死傷は益増加して、司令長官、艦長傷つき、副長斃れ、慘憺たる光景、眞に此の世ながらの地獄なり。而も生殘れる將卒は、傷を包みつゝ、尙殘砲を發つて勇敢に奮戦す。今は殘る大砲僅かに二三に過ぎず。持場を失ひたる人々は、なすべき業もなく、三々五々、焼け殘れる彼

血潮、塗る  
悄然

方此方の隅に集れり。數時間にわたる力戦苦闘に、服は裂け、帽は飛んで、手足は血潮に塗れ、唯悄然として一語を發するものもなく、互に相顧みて長歎息するのみなり。日漸く暮れんとす。我が主力艦隊は、廢殘のスワロフまたなすなきを看るや、之を激浪の裡に遣し、逃れたる敵艦を追うて北上しぬ。

一〇 スワロフの勇戦 二

是より先、司令長官ロジエストウエンスキーは、身に弾片を受くること兩度、頭足二箇所に重傷を負ひて、人事不省に陥りぬ。されど、艦内は到る處火災起り



軀

て、彼が六尺の軀を横たふべき處すらなし。

怒濤

適、驅逐艦ブイヌイは、スワロフの急を見て近づき來りぬ。幕僚は得たりと直ちに之を招き寄せ、長官を移し乗せんとすれども、端舟は既に悉く破れて、一も使用に堪ふるものなし。しかも、かくの如き荒海に於て、動搖烈しき驅逐艦を戦艦の舷側に著けんは、最も危険の事なり。若し誤つて舷々一たび相撃たんか、ブイヌイは忽ち碎けて沈没するを免れず。されど勇敢なるブイヌイ艦長は、艦體碎けて沈まば沈め、我には覺悟あり」と決然スワロフの舷側に向つて艦を進めつ。山なす怒濤に揺られて、艦體スワロフに

動搖

刹那

並

接近したる一刹那、口提督の身體は、投ぐるが如く驅逐艦に移されたり。幕僚並びにスワロフの乗員十餘名は、飛鳥の如く身を躍らしてブイヌイの甲板に飛移りぬ。

茫然

斤

スワロフの乗員は、身の敵前に在るをも打忘れ、少時茫然として煙に消え行くブイヌイの跡を見送りぬ。「長官既に避難したれば、最早心に懸ることなし。生くるも死ぬるも我等ばかり。いでや、最後の戦に、スラブ民族の勇名を日本の海に遺さん」と我に歸れば、情なや艦は益、焼けあふりて、甲板の大部は早、灰と化し、残る大砲は僅かに十二斤砲一門あるのみ。



抗戰  
米突  
閃く  
泡  
猛烈、煙焰

夕陽已に傾きて、暮れ行く海上波黒し。折しも我が第四戦隊以下の巡洋艦隊は、南方より攻來り、十四隻の軍艦より發つ速射砲彈は、雨霰の如く甲板に降注ぐ。此の時我が四隻の水雷艇は、疾風の如くスワロフに向つて突進しぬ。スワロフの將士は、僅かに残る一門の輕砲を以て尙も最後の抗戰を試みたり。距離は漸次に接近して、八百、五百、三百米突となりぬ。忽ち各艇の甲板に火光閃き、數箇の魚形水雷は、波に泡立てつゝ、スワロフに向つて進む。轟然艦底に響あり。艦體は忽ち左舷に傾斜し、一しきり猛烈なる煙焰を噴出しつゝ、最後の「ウラー」の聲

翻然、轉覆  
弔(弓)ふ

と共に翻然として轉覆したり。波上に浮びし巨鯨の如き艦底も次第に沈み、後には殘煙漠として勇士の跡を弔ふが如く、砲聲全く收りて濤獨り騒ぐ。

(此一戰に據る)

一一 廣瀬中佐

月はくらし、風は寒し。  
更けゆく夜半の海原に、  
寄せては返る浪の音を  
軍鼓ときゝなして、  
勇み立つなり、ますらをは。

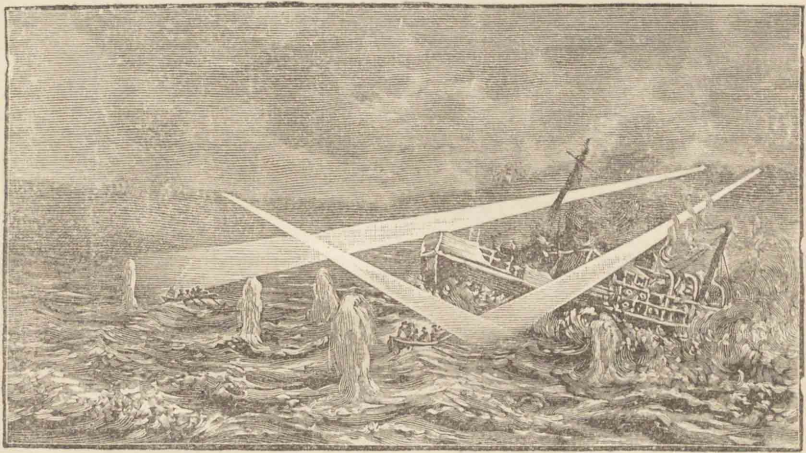


含む

溢る

はためく

勃



「七生報國、一死心堅、  
再期成功、含笑上船。」

波をつんざき風を切り、  
眞一文字に突入れば、  
あびせかくる探海燈。  
銀河横さまに海に溢れ、  
百雷一時にはためく、大小砲。

勃海灣頭、旅順口、

これ敵軍ののどくび。

はや我が船を沈めて歸れ。

はや、はや、はや。

見えぬは誰。 杉野兵曹長

「やよ杉野。 やよく杉野。」

一たび、二たび、三たび

呼べども呼べども、荒浪の

逆巻きかへるばかりなり。

又もボートに乗移る、



霹靂

折しも轟く霹靂に、  
血煙晴れて残るは主なき舟。  
たゞ一片の肉ぞ、これ  
鬼をもひしぐ益荒男のその形見。

残るはたゞ一片。されどその紅は、  
四千餘萬のはらからの  
心に染みて、櫻花  
幾千代かけて匂はん。  
大和心の鏡、此の君。

(獨唱廣瀬中佐)

匂ふ

出仕

一二 松平信綱の幼時

松平伊豆守信綱は出仕の時も、屋敷に在つても、裏付きの上下著られし事なし。常にいはれしは、人の心は衣服によりて變ず。出仕して恭敬を存せずしては、忠を盡くす事を得難し。まづ衣服より心を付けて恭敬を忘るべからず。我に於てはかくの如くつとめざれば、忠勤をなしがたし」となり。

信綱實は大河内金兵衛元綱の子、伯父正綱の嗣となる。幼名長四郎とぞ申しける。大猷院殿御誕生ありし時より御家人になされ、御あそび相手にぞ候ひ

嗣(口)



軒

梯子

ける。大殿の御寢殿の軒に、雀の巢をくひ子を産みたるを、若君こなたより御覽じて、長四郎よ、取つてまゐらせよ。」と仰せけるに、年十一歳なれば、いかにもかなふまじきよしを申す。「晝は驚きて飛去りもやせん、よく見置きて、日暮れて、こなたの軒に梯子さして登り、忍び行きてとるべし。」とありあふ人々勸めければ、力なく、日暮に忍びのぼりて、やう／＼つたひ行きけるが、ふみ損じて御つぼの内にとらとおつ。  
 \*台徳院殿御刀とらせ給ひ、障子ひらかせ給へば、御臺所ともし火とつて出でさせ給ひ、御覽ずるに長四郎にてありけり。台徳院殿、汝は何ゆゑ此處には來れ

袋

るぞ。」と御尋ありしに、「けふの晝、御殿の軒に雀の子産みたるを見て、餘りのほしさに、とりに参りて候。」と申す。「いや／＼己が心にはあらじ、誰がをしへけるぞ。」とさま／＼に御推問あれども、幾度もあらそひぬ。  
 年比にも似ぬ不敵なればとて、大いなる袋の中へおし入れて、口を御手づから封じ給ひ、柱に掛けさせ給ひ、事のよしをありのまゝに申さざらんほどは、いつまでもかくて候へ。」と仰せけれども、猶言葉をかへず。夜既に明けて、常の御座に出でさせ給ふ。御臺所は早く心得させ給ひて、かれが幼き心にて身の悲しさを顧みず、竹千代君の仰なりと申さざる事を深く感



赦す

雙

殉死

城郭

とて賜はりて、又口を封じ給ひてけり。  
 書ほど入らせ給ひて、又御推問あれども、終に其の言  
 葉を屈せず。御臺所御わび言ありしかば、さらば重  
 ねてをつゝしめよ。と仰あつて御赦あり。御臺所に  
 對はせ給ひ、彼が今の心にて生立ちたらんには、竹千  
 代殿のためには、雙なき忠臣にてこそ候はめ。と事の  
 外によるこばせ給ひけりとぞ。  
 信綱二代に歴仕して、輔弼の功少からず。諸國の大  
 名の代々奉りし人質をかへし、殉死を禁ぜし事など  
 これなり。明曆の火災、東都の城郭を始めことごとく

灰燼

く灰燼となりぬ。去年由井正雪のさわぎありし後  
 なれば、人々心安からざりしに、信綱事に臨みてたち  
 どころにとり行ひし事、皆其の所を得て、ほどなく世  
 の人心も静まり、昔に變らぬ世となりぬる事、いにし  
 への賢輔にも恥ぢずと申し傳ふる所なり。(常山紀談)

一三 阿部忠秋と松平信綱

阿部忠秋、日頃松平信綱と不和なりしが、徳川家光薨  
 去の後、一日、忠秋信綱の館を訪ひて、今や幼君の御代  
 となりたれば、貴方と我等と不和にしては、天下の御  
 爲よろしからず。向後は某も意趣を忘るべし。貴

意趣



遺恨

凡庸 重器

誓ふ

參酌

鱧、釣る

殿も遺恨なかれ」と約せられけり。  
 其の後、信綱病にかゝりて死に臨める時、忠秋病を問  
 うて、貴殿は天下の重器、吾は凡庸の才也。生死の事  
 若し代らるべき道ならば、われ死して貴殿を助くべ  
 し」と神明に誓ひていはれけるを、信綱つくく」と打  
 聞き、しばらくして卷物二卷取出し、「こはわが日頃記  
 しおける存念なり。願はくは善惡を取捨して政道  
 に參酌し、長く天下の忠を致し給へよ」と渡されける  
 とぞ。

(故花庵備忘録)

一四 鱧 釣 一

漂ふ

鏽

滑る

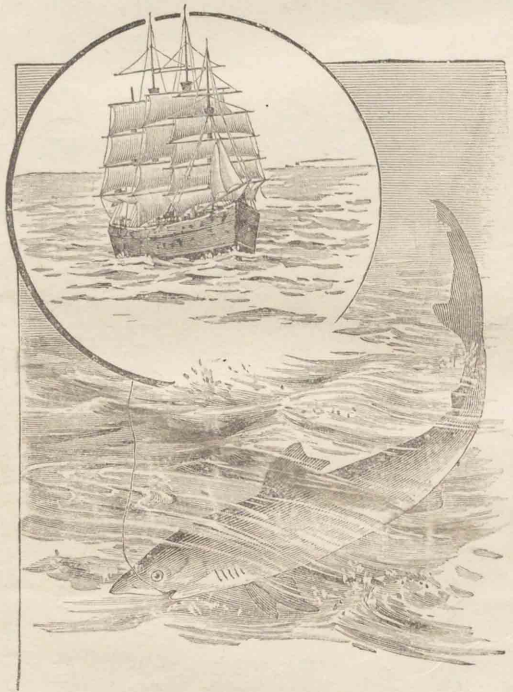
夏の初、南洋諸島に航海した歸途の事である。馬尼  
 刺を出帆してから五日目と云ふ日に、連日の風で、日  
 本最大の帆船、四本檣バークの大成丸は、三十有餘の  
 帆を展じてゐながら、僅かに呂宋島を離れた邊を漂  
 うてゐる。僕は此の時、船尾の舷側に飛出して居る  
 端艇ジヤイト吊柱の上に、つくねんと止つて鏽落をやつて居  
 る。此の時、艦の方でがやく／＼人聲がするのが耳に  
 はいつたので、其方を振向くと、人集がして、何か言罵  
 つてゐる。直に、ダヴィットから滑り下りて駈付け  
 る。目を皿にして見下すと、大きな鱧が一匹、海中を  
 あちらこちらとゆつたり泳ぎ廻つてゐる。鱧と云



獯猛

ふと、直、獯猛なものと思はれるが、今此處から、綺麗な海水をすかして眺めると、たゞ美しい愛らしいといふ感じがするばかりである。身を軽く轉ずる度に、

白いつやのある腹をちらりと見せて、日光に映る脊中が眞珠の様な光を放つ。隣に居る友達に「水先魚を見給へ」と教へられて、よく



一緒

餌、叫ぶ

見ると、鱧の願の下をちよろくと忙しく泳いで居る一匹の小魚がある。一進、一退、右往、左轉、影の形に添ふやうに、小魚は鱧と一緒に動く。小魚が動いて鱧が動くのか、鱧が動いて小魚が動くのか分らん。殆ど同時である。かの鋭い眼を持つて、進退自在な鱧が、この水先を要するとは、一寸不思議である。併し幾ら空腹な時でも、こればかりは食はずに保護して居るのは、何か鱧に弱點が無くてはならん。「早く鉤に何でも餌を付けて出せ」と口々に叫ぶと、老水夫長が「あまり大きな聲を出して騒いでほだ目だ」と例の落付いた調子で云ふ。見ると、人の好ささう



暫目

な顔をして、切りと小さな鎖サネに大きな鉤を付けて、それに鮭の頭を引掛けて居る。暫時は、水夫長の顔と手先を交るくに眺めてゐる。

其の中、釣道具も出来上つたので、鉤をばかりと海の中へ投り込む。それが、つひ鱧の頭の邊に落ちたが、びくりともしない。大様なものである。大様ではあるが、鮭の頭は食ひたいらしい。一寸來ては、當つて見る。が、一向腹を返さない。腹を見せなければ食はないのだ。二三遍其處らを廻つては餌に來て、またついと後の方に姿を隠して仕舞ふ。「鮭は食ひたいが、後に付いて居る網アミが氣にくはん」と云ふ様子

遍  
隠す

且

である。

哨艦

少時見えないので、氣の早い連中は、「もう逃げたのか」と落膽する。「一旦鱧が附いたら、容易に退くものではない」と一人の水夫がしたり顔に云ふ。「鱧は大抵一匹は來ないが、是は哨艦だらう」といふのは、海軍出身の舵取である。「來た、く」と叫ぶ者がある。見ると、猛勢に突進して來る。「さては、思ひ返して食ふ氣かな」と固唾を飲んで見て居ると、また一寸當つたきり、知らん顔をしてゐる。其處へ、船長が、ビール腹を抱へる様にして、やつて來て、例の微笑を含みながら、「皆、鱧に吞まれて、仕事を止めてはいけません」と小さ

固唾

微笑



いが力の有る聲で、殊に語尾を明確に言ふ。乗組員は、船長の温言を、他人が目をむいて怒るよりも、恐入つて聴くのが常で、皆、蜘蛛の子を散らすやうに、ばらばらと立去つて、各自の仕事を續ける。僕は、また、ダヴィットに立つて、カーンくと、鱧の事ばかり考へながら叩く。

一五 鱧 釣 二

作業 奴

午前の仕事が済んで、午後の作業に移つて間もなくである。「鱧が三匹來た」と云ふから、出て見ると、丁度其の時、朝から附いて居た奴が腹を見せた。「それつ

詰む

踊る

頗

と云ふので、綱を手繰つたが、此の時、彼は獰猛な性を顯して、非常な力を以て、海から一寸も離れまいと、極力抵抗する。終に、彼の力が優つたのか、綱が切れて釣落して仕舞つた。張詰めた元氣を凝らした息氣が一度に抜けて、皆落膽する。

「物有り、海中に踊る」と見れば、また鱧が引掛つたのである。誰かが「鱧が釣れた」と大聲に叫ぶと、皆、四方八方から飛んで來た。手擦（ミ）に餘つた者は、檣梯（ギン）にも登つて居る。鱧は、例に依つて悪戦頗る力めて、水から出まいともがく。船ではえいくと綱を手繰る。「また釣落しやしないか」と危ぶんで見て居ると、此度



綸

跳ぬ  
躓く

は鉤がよく掛つたか、鱧は力盡きて、水から揚る。皆が一度に喝采する。水から出た鱧は、少しも暴れない。温順しく、體重でも測るやうにぶら下つてゐる。二間は十分あらう。輪にした綱を綸に沿うて下げて、鱧の胴體をくゞり、之を檣梯に附けた滑車キテロッツに通して、えい／＼上げると、急に猛烈な勢で暴れ出した。最後の力戦を試みるのであらう。もうしめた。温順なものだと近寄つた連中は、不意の活動にびつくりして飛退く。鱧は思ふまゝ、其處らを跳廻る。危く鱧ひらにはたかれようとした人もある。逃げかけて綱具に躓き、あはや鱧の下に敷かれようとした者も

惑ふ

逞し

頸

迸る

賄白く

振る

瞬間

ある。皆、顔色を變へて迷惑ふ。「吾が最期を見よや」と、鱧は愈、其の威を逞しうする。併し、さう何時までも暴れさせては置かれぬ。氣早の連中は、キャプスタン、バーを振つて頸部を亂打する。鮮血がさつと迸つて、甲板をから紅に染める。實に慘憺たる光景である。大なる物の死は、小なる物の死よりも、一層悲惨な感じを與へる。終に數名で、胴體をくゞつた綱を曳いて、賄所の横まで運ぶ。鱧は何と思つたか、じつとして少しも動かなくなつた。意氣込んで振上げた棒が、空中で立竦む。ちと薄氣味悪く思つたのであらう。それも瞬間。三四人が聲を合はせ



一杯

背肉

覺悟  
痛む、臟腑

て、頭部をめがけて力一杯にうちおろす。が、びくりともしない。これに安心してまた試みる。更に、驚く氣色がない。眠る様に、段々弱つて行く。水夫長は「時到れり」と腰にしたシトナイフを取つて、柄も通れ。と其の腹に突立てて一文字に引く。鱧は其の大きな體を僅かに動かした。覺悟を極めた鱧の死は、美はしくも、また痛はしい。臟腑を引出して、バケツで海水を何杯となく打ちかけ、鮮血を洗へば、生臭い風が強く鼻を打つ。水夫長は平氣なもので、腹を奇麗に洗ひ、左右の鰭を拂ひ、更に刀を持ちかへて、背の鰭を半分切り掛けた。鱧は此の時猛然として

辟易

抑ふ

面影

溶く

暴れ出した。驚いて一度に皆が手を引く。彼は轉々として甲板上を轉び廻る。腹中已に空しく、人間にしては手足に當る鰭は切斷せられながら、尙、人の近づくことを許さないのである。これに辟易して、二三人が恐るゝ體軀を抑へて、漸く鰭を切落した。鱧はこれから動かなくなつた。少時して來て見たが、鱧は面影も留めず、其の雪の様に白い生きゝとした肉は、大きな鉢に積上げられて、傍では、賄長が西洋味辛を溶いて居た。さきに、太洋を我が物顔に泳ぎ廻つて居た鱧も、今頃は釜中の狭きをかこつてゐるであらう。  
(雜誌ほととぎすに據る)



一六 テセウスの剛勇 一

テセウスは母の物語に、始めて身の上を聞き、賢明勇武の<sup>\*</sup>アテーネ王を、その身の父ぞと知れる心の喜限り無く、決然<sup>\*</sup>トロエゼンを立ち、父の國に赴かんと、單身危険の途に向つて進み行きぬ。<sup>\*</sup>エギナ海を右手に見つゝ、行く程に、トロエゼンを離るゝこと、はや數里になりぬ。忽ちにして大澤の邊に出づ。地は一歩毎に脚下に沈み、深緑色の死水は、一條の小徑を挟みて左右に湛々たり。されども水草の中より<sup>\*</sup>火龍の躍り出づることなかりしかば、程無く此の沼を

赴く

挟む

湛々

過ぎて、險しき山路に入るを得たり。分け上るほどに、やがて土黒き絶頂に達しぬ。四望すれば<sup>\*</sup>希臘の全土を眺め得べし。峠を降りて行くに、或は小暗き谷に入り、或は斷崖の縁に出で、或は絶壁の下を過ぎて、遂に一大森林に入りぬ。長幹古木蔚然として密生し、晝猶日光を見ず。此の森に、<sup>\*</sup>クラブキヤリアーとて、一人の賊住めり。平野に出で、牧場を襲ひて羊を奪ひ、時としては人を捕へ、森にひき込みて之を食ふ。又巧みに叢林の裡に隠れ、旅人の過ぐる時、躍り出でて之を撲殺す。賊は遙にテセウスの服装の華美なるを見るより、心に

斷崖

蔚然

襲ふ

叢林

撲殺



微塵(主)

喜び、深き叢の中に身を伏せ、手なれの棒を引きつけて、忍びて彼の近づくを待てり。  
テセウスは眼鏡く耳聰みみき若者なれば、曾て獸にも人にも驚かされたること無し。やがて、彼處に来るや、賊は躍り出でて打ちかゝるに、テセウスひらりと身をかはせば、棒はしたゝか大地を撲つ。賊があわてて棒取直さんとする時、テセウス足をあげて跳倒す。クラブキヤリアーの怒り號ぶ聲雷の如く、起上らんとするを、飛びかゝり、棒を奪ひて一打すれば、巨漢の頭は微塵となりぬ。テセウスは賊の復、旅人を苦しむる能はざるを見定め、彼の棒を肩にして、しづく

遇ふ

と此處を立去りぬ。

梢

かくて又一つの山に上るに、珍しくも一人の老人に遇ふ。老人曰ふ、必ず此の山を降りたまふべからず。山の麓に森あり。森のこなたにシニスと云ふ恐ろしき賊住めり。残忍の性、世に類無く、旅人來れば之を捕へ、二本の松樹の梢を一處に引寄せ、旅人の片手片足を一樹に結び、他の手足を他の樹に結び、引寄せたる二樹を放てば、樹は彈ねかへりて、旅人の五體めりしと二つに裂く。シニス之を見て無上の樂しみとするが故に、人彼をパイ<sup>\*</sup>ンベンダーと呼びて、怖るゝこと限り無しと。テセウスは「さては、今ぞ怪物

怖る



を除くべき時ならん。とて、老人の厚意を謝し、平然として彼の山道を下り行きぬ。

淙々

聞きしまゝなる賊の家程なく急坂の下に見ゆ。家の後には數十尋の溪谷あり。一水淙々として奔流せり。前は數畝の花園にして、名も知れぬ百花咲亂れたり。この花園の眞下は松林にして、此處彼處の梢には、無慚なる旅人の白骨、日と風とに暴されて懸れり。

踞す

細

凄し

賊シニスは、折しも路傍の石に踞してありしが、テセウスの近づき来るを見るや、卷きたる繩を手にして馳來り、物凄き笑顔を向け、旅人よ、いざ、我が宿に案内

響應

詰る

せん」と云ふ。「いで、如何なる響應かある。我が爲に曲げたる松の用意はよきか」と詰り反せば、實に、松は二株まで曲げてあり。汝の來るを待つこと久し。」

縛す

言ひつゝ、シニスは手にせる繩を繰りて、テセウスを縛せんとす。テセウスは素早くかいくゞり、足を取りりて大地に投倒せば、シニス無言に跳起きて、又も烈しく組付くを、忽ち木の根に取つて押伏せ、繩を奪ひて、かたの如く二本の松に結び付けしは、實に心地よき限りなり。

「いで、罪業の報思ひ知れ」と、曲げたる松を放たんとす



れば、賊はほろくと涙を流して、命助からんことを請ふ。されどテセウスは耳にも入れず、そのまま、手を放てば、松は左右に跳反り、シニスが五體は、二つに裂けてぞ亡せたりける。

一七 テセウスの剛勇 二

丘(こ) 鷺環形

かくてテセウスは、又も丘一つ越えて、山路深く行きくけるに、遂に海に臨める大きな巖の上に出でぬ。脚下は數十丈の斷崖にして、一路僅かに其の上に通ぜり。日は一草も無き灰色の岩を照らし、空には山鷺鋭く叫びて、環形に舞へり。

湧く

塞(ま)ぐ 噛む

龜

跪く

テセウス平然として此處を行くに、岩の間より清水湧出づる處あり。左手の巖は斷崖に臨みて、路は益迫り、僅かに一人を通ずるのみ。と見れば、泉の側に一人の巨漢あり。大きな棒を横たへ、岩に踞して道を塞げり。絶壁の下、荒浪岩を噛む處には、船よりも大きな海龜、眼を光らせ頭をあげて、落來る物を待つ。こゝは巨人スキロンの住所にして、普く人の怖るゝ處なり。スキロンは彼の險路に據りて、旅人をおどして、先づおのが足を洗はしむ。旅人命に従ひて彼が脚下に跪く時、一蹴してこれを斷崖の外に投ず。海龜即ち之を食ふ。スキロンは斯くして海



携ふ

飢う

龜を養ふと云ふ。  
 テセウスやがて、彼處に近づけば、スキロンは案の如く棒を携へて起ち上りつゝ、大聲に「待て、我が脚を洗はざる者は、此處を過ぐべからず。とく來りて脚下に跪け」と罵るを、テセウスは自若としてうち笑ひ、海龜は今飢ゑてやある。汝は我を以て彼を養はんと思ふ。汝は彼が腹に入らざるべからず。されど、先づ我が脚を洗はざるべからず。とて、手にせる棒を焰も出でんばかりに打振りて、只一打と前進す。テセウスは少しも騒がず、彼のクラブキヤリアーが手より奪ひ來れる鐵棒を揮

宙

咽喉

絞る

因果

ひて打合はずに、スキロンが棒は宙に飛んで、海中に落つ。巨漢は怒凄しく、飛びかゝれば、テセウスは早くも棒をすて、雙手に其の咽喉を引きしめつゝ、金剛力に、彼の斷崖に臨める岩の上に押倒せば、巨漢の上體は岩より外れて、今にも海に落ちんとす。「許せ、其の手を放て。汝に路を譲らん」と、聲ふり絞りて叫ぶを、テセウス右手に長劍を抜きて、さきにスキロンの腰掛けし泉の邊の岩に踞し、「いざスキロン我が脚を洗へ、洗はずや」と命令す。スキロン色を失ひつゝ、跪きて其の脚を洗へば、「因果の報罰、覺悟せよ」と、鐵脚を舉げてはたと蹴る。



震動

拒む

蹴られて叫ぶ巨漢の一聲、山上の鷲のそれよりも鋭く、遙下なる波の中にぎんぶとばかり水煙上れば、彼の海龜さへ怖れて、底にぞ沈みける。暫くありて海上に聲あり、「我此の悪漢を如何にせん」と言ふかと思れば、大濤どつと打反して、巨漢の屍體は、その濱邊にうち上りぬ。忽ちにして陸に聲あり、「我はた此の悪漢を如何にせん」とて、地は怖ろしく震動し、屍體はまたも海上につき返さる。それより水陸一度に暴れ騒ぎ、巨漢の軀は荒波にはねられて、空中高く投げられしが、清空亦之を容るゝを拒み、復び大地に投げおろされて、其のまゝ一巨巖と化す。エギナの灣の

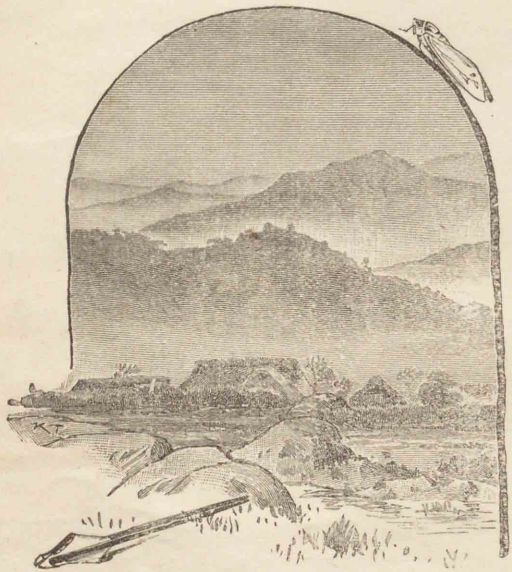
醜し

あこがる

奥に、黒く醜き大巖の、一部は砂に隠れ、一部は空中に暴されて、今も在るは是なりとぞ。

(希臘神話)

一八 夏 休

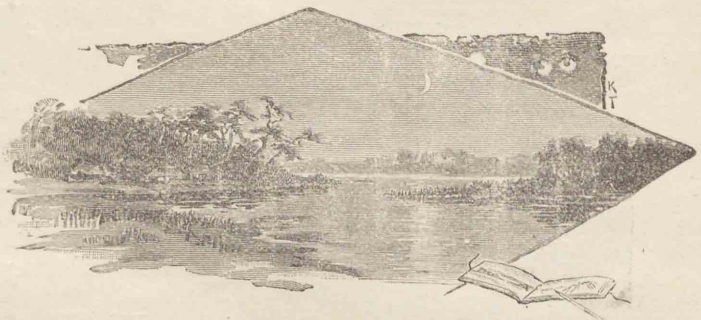


早くも間近に休はなり  
て、  
そゝろに心のあこがれ  
行くや、  
風そよそよ吹來る  
山に、  
水さらさら流るゝ



袂

さとわ



川に。

朝山たどりて我が越え來れば、  
見さくる山々夢より淡く、

露はらはら袂をぬらす、  
雲ゆらゆら谷間を流る。

釣籠片手に岸邊に立てば、

さとわの燈火木の間にあかく、

月きらきら川瀬に碎け、

魚ひらひら竿にぞ上る。

間近になりたる此の夏休、  
斯くてぞ暮さん、樂しの休。

疾く來よ來よ、此の夏休。

疾く來よ來よ、此の夏休。

(中等唱歌)

一九 猫の作戦計畫

吾輩はとう／＼鼠をとる事に極めた。

元氣旺盛な吾輩の事であるから、鼠の一匹や二匹は、  
とらうといふ意志さへあれば、寢て居ても譯わけなく捕  
れる。今まで捕らんのは、捕りたくないからの事さ。

吾輩  
旺盛



桶

春の日はきのふの如く暮れて、折々の風に誘はる、花吹雪が、臺所の腰障子の破れから飛込んで、手桶の中に浮ぶ影が、薄暗き勝手用のランプの光に白く見える。今夜こそ大手柄をして、うち中驚かしてやらうと決心した吾輩は、あらかじめ戰場を見廻つて、地形を飲込んで置く必要がある。戦闘線は、勿論餘り廣からうはずがない。疊敷にしたら、四疊敷もあらうか。その一疊を仕切つて、半分は流し、半分は酒屋八百屋の御用を聞く土間である。竈は貧乏勝手に似合はぬ立派なもので、赤の銅壺がひか／＼してゐる。其の後の羽目板との間二尺が、吾輩の鮑貝の所

勿論

椀

播鉢

交叉(又)

在地である。茶の間に近き六尺は、膳椀皿小鉢を入れる戸棚となつて、狭き臺所をいと狭く仕切つて、横に差出たむき出しの棚と、すれ／＼の高さになつて居る。其の棚の下に、播鉢が仰向けに置かれて、播鉢の中には、小桶の尻が吾輩の方を向いて居る。大根卸播粉木が並べて懸けてある傍に、火消壺が置いてある。眞黒になつた椽の交叉した眞中から、一本の自在を下して、先には平たい大きな籠をかけてある。其の籠が、時々風に揺れて、大様に動いて居る。是から作戦計畫だ。どこで鼠と戦争するかと云へば、無論鼠の出る所でなければならん。如何に此方



便宜  
研究

に便宜な地形だからと云つて、一人で待構へて居ては、てんで戦争にならん。是に於てか、鼠の出口を研究する必要が生ずる。どの方面から来るかなと、臺所の真中に立つて四方を見廻す。何だか東郷大將になつた様な心地がする。下女はさつき湯に行つて、歸つて來ん。子どもはとくに寝た。主人は相變らず書齋に引籠つてゐる。細君は何をして居るか知らない。時々門前を人力が通るが、通り過ぎた後は、一段と淋しい。わが決心と云ひ、わが意氣と云ひ、臺所の光景と云ひ、四邊の寂寞と云ひ、全體の感じが悉く悲壯である。どうしても、猫中の東郷大將とし

書齋

寂寞

周密

風呂

か思はれない。かう云ふ境界に入ると、物凄いうちに一種の愉快を感じるのは、誰しも同じ事であるが、吾輩は此の愉快の底に、一大心配が横たはつて居るのを發見した。鼠と戦争をするのは、覺悟の前だから、何匹來てもこはくはないが、出て來る方面が明瞭でないのは、不都合である。周密に觀察して見ると、鼠賊の侵入するには、三つの行路がある。かれらが若しどぶ鼠であるならば、土管に沿うて、流しから竈の裏手へ廻るに相違ない。其の時は、火消壺の陰に隠れて、歸り路を絶つてやる。或は溝へ湯を抜く漆食の穴から風呂場へ廻つて、勝手へ不意に飛出すか



蓋  
攫む

楯、遣る  
嗅ぐ

煤

も知れない。さうしたら、釜の蓋の上に陣取つて、眼の下に來た時、上から飛下りて一攫にする。それからと、又あたりを見廻すと、戸棚の戸の右の下隅が、半月形に食破られて、彼等の出入に便なるかの疑がある、鼻をつけて嗅いで見ると、鼠臭い。若しこゝから呐喊して出たら、柱を楯に遣り過ごして置いて、横間からあつと爪をかける。もし天井から來たらと、上を仰ぐと、眞黒な煤がランプの光で輝いて、地獄を裏返しに吊した如く、一寸吾輩の手際では、上る事も下りる事も出來ん。まさか、あんな高い處から落ちて來る事もなからうからと、此の方面丈は警戒を解く

智慧

論據

事にする。夫にしても、三方から攻撃される懸念がある。一口なら、片眼でも退治して見せる。二口なら、どりにかかうにか遣つてのける自信がある。併し三口となると、吾輩も手のつけ様がない。どうしたらよからう。どうしたらよからうと考へて、好い智慧が出ない時は、そんな事は起る氣遣ひはないとさめるのが、一番安心を得る近道である。又法のつかないものは、起らないと考へたくなるものである。吾輩の場合でも、三面攻撃は、必ず起らんと斷言すべき相當の論據はないのであるが、起らんとする方が、安心を得るに便利である。安心は萬物に必要であ



る。吾輩も安心を欲する。よつて三面攻撃は起らんと極める。

夫でもまだ心配が取れんから、どう云ふものかと段々考へて見ると、漸く分つた。三箇の計略のうち、いづれを選んだが尤も得策であるかの問題に對して、自ら明瞭なる答を得るに苦しむからの煩悶である。戸棚から出る時には、吾輩之に應ずる策がある。風呂場から現れる時は、之に對する計がある。又流しからはひ上るときは、之を迎ふる成算もあるが、其の内どれか一つに極めねばならん事になると、大いに當惑する。東郷大將は、バルチック艦隊が、對島海峽

得策

煩悶

成算

當惑

を通るか、津輕海峽へ出るか、或は遠く宗谷海峽を廻るかに就いて、大いに心配されたさうだが、今吾輩自身の境遇から想像して見て、御困却の段、實に御察し申す。

吾輩は斯く夢中になつて智謀をめぐらして居る。夜はまだ浅い。鼠はなか／＼出さうにない。吾輩は大戦の前に一休養を要する。  
(夏目漱石)

二〇 小笠原島なる友の許へ

御別れ申候うてより絶えて御無音申上げ申譯もこれなく候昨秋は見事なる御地の果物頂戴いたし有

頂戴也



孤

慕(心)ふ

屢

難く存候先日も病氣の御見舞狀下され重々の御厚  
 意厚く御禮申上候今日も心の華にて孤島の御消息  
 を拜見讀むからに心持よくこれが日本の國の島か  
 とレモン花咲く御地慕はしくあこがれ申候  
 小笠原島とや實は私は三年前よりこの洋中の島な  
 つかしく一度はこの島にたどらんと屢計畫いたし  
 候へども夏の休日とかく意の如くならず今に素志  
 を果しかね候事此の上もなき恨事に候此度は相識  
 の貴君も在すことなれば貴君御在島の間には是非々  
 々御尋ね申さんと存候此の夏こそは何とか工夫し  
 て御目にかゝりたきものに候尙其の節は旅行上何

かの御注意承りたく候  
 當地は春とは云ひながら昨今雨にてなかく、寒く  
 花もよそにして引籠り居り候時節柄御自愛の程願  
 はしう存候草々

(活例名家書翰)

二一 労働の神聖

米國が天然の大に加ふるに、人工の大を以てして、盛  
 に進歩發展しつゝあるは、ナイヤガラ瀑布に於て之  
 を見る事が出来る。紐育市に、四十階に餘る高樓  
 の雲表に聳ゆるのも、この大陸的氣象の一現象に過  
 ぎん。彼等米國人は、米國を以て世界第一たらしめ

聳、高樓  
聳ゆ



所謂  
魂(鬼)  
相場  
列強

階級  
富豪(家)

んことを期してゐる。而して世界に於ける富の中  
心たり、又世界の最強國たらしめんと奮闘しつゝあ  
る。所謂亞米利加魂はこれである。紐育の市場が、  
半ば以上歐洲の相場を支配し、ウオシントン政府が、  
屢、世界の列強を動かすことは、十數年來の歴史がこ  
れを證明して居る。二十世紀に於ける米國の未來  
は、實に恐るべきものと云はねばならん。

米國が此の大を成す所以は、所謂門戶開放の結果に  
外ならん。米國は歐洲諸國の如く古來の習慣も無  
く、階級の制度も無く、唯全土を擧げて、各人の奮闘場  
たらしめて居る。従つて一雙の鐵腕、よく大富豪た

信條

坐食

充(九)滿

るべく、匹夫と雖もよく大統領たるべしとの觀念は、  
深く米國民の頭腦に印せられて、國民みな活潑勇敢  
の氣象に富み、進取の精神は到る所に溢れてゐる。  
此の活潑なる米國の社會に於ける信條は、實に「勞動  
の神聖」といふ事にある。父兄から學資を仰いでゐ  
る學生、兒童も、暑中休暇を利用して、自ら金を得る手  
段を講ずる。巨萬の富を有する者も、坐食の徒と呼  
ばるゝを恥としてゐる。新聞片手に電車に飛乗り、  
如何にも忙しさうなのが、彼等の常である。「時はこ  
れ金」の思想は、上は大會社の重役より、下は小僧職人  
に至るまで、其の全身に充滿して居る。



ナイヤガラの壯觀は、幾萬年の後、或は之を見ることを得ざるに至るかも知れん。米國の山野は、數百年にして、全く開拓し盡さるゝ事もあらう。然れども此の勞動神聖主義、時これ金の思想は、永久に米國人を支配すべきものであらう。若し米國人にして一たび此の精神を失はば、米國はやがて自滅の外無いではあるまいか。たとひ自滅するには至らなくても、斯くては米國は、世界に於ける恐るべきものの一つでは無いのである。

(黑板勝美)

二二 富士登山 一

未明  
草鞋

七月三十一日未明、我が富士登山隊は、名古屋停車場を出づ。一行は教師四人、生徒五十人、いづれも草鞋（草鞋）の輕々しきいでたちなり。

汽車は參尾の平野を過ぎて、遠江に入る。濱名湖の邊、雨濛々たり。走れる白帆かゝれる漁船、見るも面白し。大井川・天龍川を打過ぎ、富士川の鐵橋を渡れば、間もなく富士驛につく。時に正午すぎ。仰げど富士山は雲につゝまれて、影だに見えず。「頂はかしこ。」裾野はあのあたりなど、とりどりに言合ひつゝ、五臺の馬車に分乗して、大宮に向ふ。大宮につきたるは三時半。直ちに淺間神社に詣でて、一

詣づ



亭(上)

の無事を祈り、大宮亭といふ旅館に宿る。雨は止み  
たれど、富士の姿は未だ見えず。

纏ふ

明くれば八月一日、まだほのぐらきに宿を出づ。笠  
を戴き、蘆(わづ)を纏ひ、金剛杖を手にしたる登山姿をか  
しきよ。二人の強力を案内に立てて登りにかゝる。  
行く程に夜は明け離れ、空は心地よく晴れて、富士の  
姿雲の上にあらはれたり。

心ゆてに見し白雲はぬもやまて、

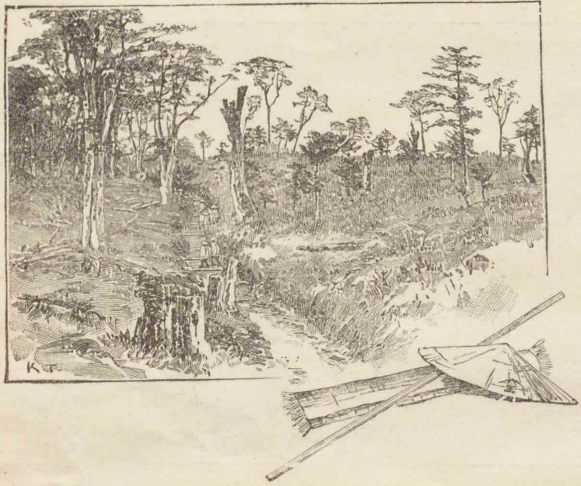
思をぬそらに晴るゝふぶねぬ。

詠ず

と古人の詠ぜしもうなづかれぬ。萬野原(まんのの)篠坂(しのさか)欠巢(かひす) 大宮  
畑(はたけ)などいふ所を過ぎ、一合目の休泊所に至る。

喫、券(カ)

よりは三里ばかり。表口登山案内會社本部ありて、  
宿泊券及び頂上に至るまでの喫茶券等を賣る。こ



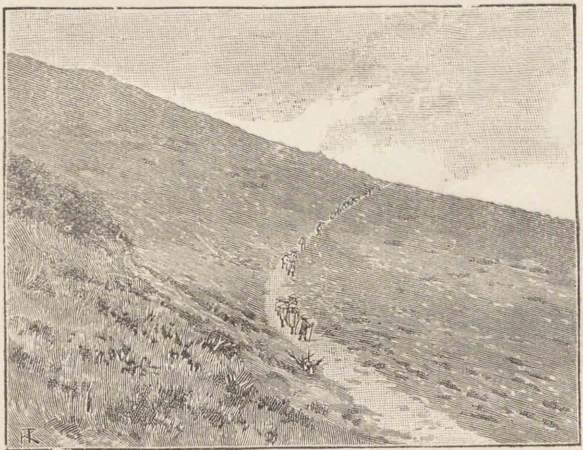
疲  
休憩(心)

れよりは所謂木山にして、櫟(けい)の  
の太木そゝり立ちて、晝猶暗  
きばかりのところもあり。  
二合目に至れば、骨も冷ゆる  
ばかりの清泉湧出でて、登山  
の疲も洗ひ去らるゝ心地す。  
中食をなし、一時間ばかり休  
憩して、又登りにかゝる。二  
合五勺の馬返しを過ぐれば、



峻し

次第に峻しくなり、四合目あたりよりは、焼石のみにして、草木は更に見えず。俗に「毛なし」といふ。五合



清淨

目よりは六合目、六合目よりは七合目と、登るに随ひて路益急に、疲愈甚しければ、節面白き強力の歌を聞き、或は自ら六根清淨を唱へなどして、氣を勵ましつゝ、漸く八合目の石室につく。時に午後五時。見下せば、四合目以下雲につゝまれて、一面白濛々、こ

たゆたふ

欺く



てて室に入る。室は廣さ二十疊ばかり、四方は石を

れ即ち雲の海の景なり。走る雲あり、たゆたふ雲あり。ふじのねの麓抜出でて行く雲の、

足柄山のゝねにゝ  
ゝをり。

の歌も、まことにわれを欺かざるを知れり。我等は今夜こゝに宿る豫定なれば、直ちに草鞋をぬぎす



板葺

沁む

疊み上げて壁となし、板葺の屋根には、數多の石を重ねて、風に吹きさらはれざる用意をなせり。日は早暮れつ、寒さは次第に身に沁むまゝに、中央なる爐を圍みて、室の主のすゝむる夕飯をすまして寝につく。

二三 富士登山 二

爛然

「御來光も間近し」とあわたしく強力によび起されて、急ぎ朝食したゝめ、室の前なる御來光岩に上りて、日の出を待つ。白み渡れる東の空、やがて紅色になり、黄金色になりて、爛然たる光きらめきつゝ、朱盆の

旭

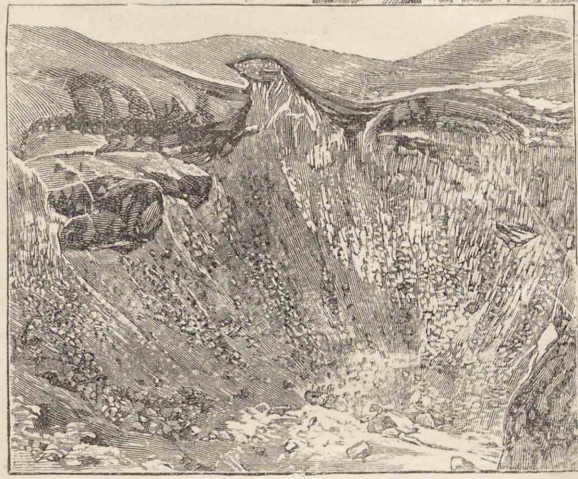
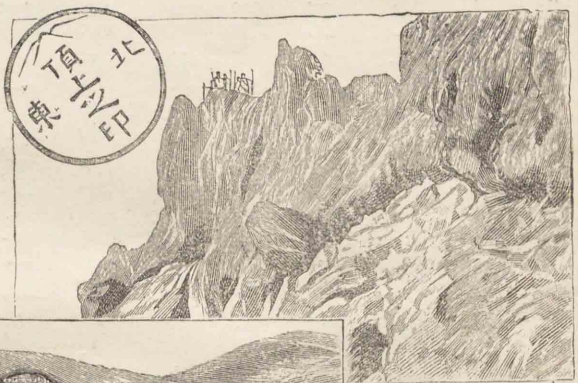
海拔

俄

如き旭日さしのぼりぬ。顧みれば富士のかげは遠く西にひきて、數十里の彼方に及び、果ては空中高くかゝりて、うす墨の繪の如し。これ即ち御影富士と稱して、稀に見ゆるものなりとぞ。これより上る路は次第に峻しく、九合目もすぎ、最も峻しき胸突八町も過ぎて、漸くにして頂上に達す。淺間神社奥宮を拜し、電報もて一行の安着を學校に報ず。頂上の内部は、舊噴火口にして、これをめぐるを「お鉢めぐり」といふ。われらは左にめぐりて、先づ最高峯なる劍が峯に上る。海拔三千七百八十米突。あゝ、我はいま日本第一の高處に立てりと思へば、俄に氣

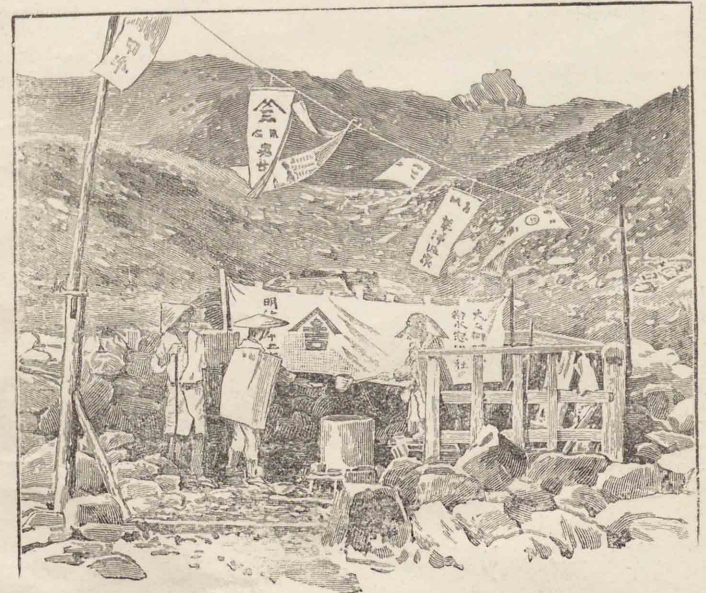


伊豆七島  
大島・新島  
御倉島  
我根島  
神倉島



も大きくなりたる心地ぞす  
る。見下せば房總の半島霞  
の如く、伊豆の七島海に浮ん  
で、緑の紙に點  
打ちたるが如  
し。遠州灘は  
遠く、駿河灣は  
近く、箱根・愛鷹  
の諸山は、恰も  
箱庭を見るが  
如し。

撮影 汲む



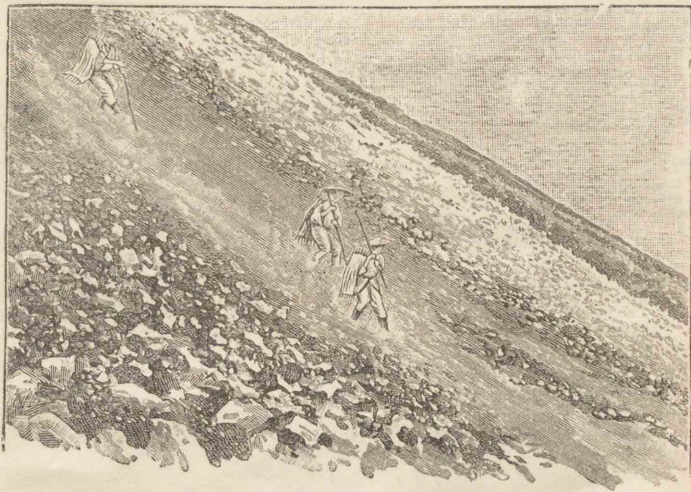
のほとりにて、一同記念の撮影をなし、御殿場口に下

聞知しと利も、  
思むしよりも、  
見しよりも、  
のりて高き  
山はふじね。  
と古人のよみしは、さ  
ることぞかし。こゝ  
を下りて万年雪をふ  
み、銀明水を汲み、觀測  
所の傍をすぎ、金明水

御田春彦



恰好



出もまた、く間に後にになりつ。ひた走りに走り、一

りかゝる。小石ころくくと足ふみすべらす千鳥路を、曲り曲りて、漸く七合目に至る。こゝより三合目までは砂走とて、一面の砂子にして、走り下るには恰好の傾斜なり。三足の草鞋をはきて、一步一步に滑りつゝ、轉び落つるやうに下る。寶永

坊

親戚(弔)

時間ばかりにして三合目につく。更に下ること一里許にして、太郎坊につき、馬車を雇うて御殿場に向ふ。御殿場まで三里餘、一里ばかりは森林うちつき、その餘は田野うち開けたり。御殿場につきたるは午後四時。こゝにて登山隊は解かれたれば、東京なる親戚を訪はんために、上り列車に投じぬ。

二四 小話三章

百兩の夜具

古人の語に「中流失舟一壺千金」といへることあり。俄なる折身の危きことを免るべきものあらんには、



屑 濃 渦

羨む

其の物は賤しくとも、千金の價も貴きものには非ざるべし。

何れの頃にかありけん、東都の大火に、老若男女四方に逃迷ひける折しも、夜風強くして、火屑は雨の脚よりも繁く、濃き烟渦巻きて、面を向くべきやうも無かりけり。

こゝに一人の男、百兩の金を手にして逃げけるが、また一人の男の、一枚の夜具を頭に被りて逃行くを見て、羨ましくや思ひけん、其の夜具買はん。と言ひかくれば、幾何の價に買ふか。と問ふ。「百兩に買はん。」といへば、然らば賣り申さん。とて、夜具を渡し、百兩の金を

引攫み、兩人先を争うて逃げたりけり。夜具持てる男は、是にて煙と火屑とを防ぎ、辛うじて逃延びたれど、百兩の金持てるは、煙に捲籠められて、息もかへされぬやうになりて、斃れたるまゝに、茶毗チャピ一片の煙となりぬとぞ。夜具一枚の代に百兩を惜しまざりしは、善く生命を惜しむものにやあらん。

鳴門の舟路

阿波・淡路の間なる鳴門の瀬戸を、舟にて押渡ること五十餘年になりて、舟人の頭とされる者ありけり。或人これに向ひて、鳴門の舟路いかゞ。と問ふに、知らず。と答へたり。問ふ者、此は心得ぬことなり。御身



不審

此の海を知らぬ事やあるべき。舟人の頭いふ、御不審はことわりなれども、斯く答ふるは舟人のおきてにて、誰に問はれても、いつも、斯く申すこととなれり。鳴門は世に聞えたる波荒き所なれば、幾度ゆきかふとも、知れりとは思ふべからず。始めて乗り試みる時の如く思ひて、用心の上にも用心すべし。舟の鳴門にかゝりぬる時は、吾等舟人に下知して、こゝは始めての舟路、鳴門の難處、舵はよきか、帆はよきか、荷物の積方はよきか、などいひつゝ、十分の用意したる後、舟を進むるためしなり。と答へたりとぞ。世の中を渡るにも、此の舟人の頭の如く、心せんには、危き事に

下知

は逢はざらんかし。

文字の點畫

文字の點畫の誤は、折に觸れて大きなる過ともなること、今更いふまでもなし。假令、點畫の誤あらずとも、少しの運筆の勢の過不及にて、事によりては身の禍となることあるべし。

大炊頭

贈る

昔、下總古河の城主土井大炊頭の家臣に、右筆の役を勤めたりし人ありけり。主人より同列の諸侯へ贈る文の表書に、大炊頭と認めけるに、大炊の炊の字、筆勢のいさゝか餘りたるゆゑ、旁の上の方へ字畫延出でたれば、煩の字の草體にまぎれしを、心附かずして



祿

慎む

贈りけり。見る人此は大わづらひの頭なり。とて、腹をかゝへて笑ひけり。「かやうの字を書きて、外聞あしき事を仕出したる者は、右筆の役にはさし置くべからず。とて、遂に其の祿をば離されにけり。尋常の文字ならんには、さまでの事もなかりしならん、煩の字義は、忌まはしきものなるにより、祿をさへ離さるる事となりぬ。筆畫を慎むべき一つのためしならんかし。

(細川潤次郎)

二五 六 書

凡そ世界の文字を大別すれば、義字、音字の二種とな

釋す

る。漢字は即ち義字に屬するものなり。古來、漢字の構造及び使用を分ちて六書とす。六書とは、象形、指事、會意、諧聲、轉注、假借是なり。而して象形より諧聲までは、結構法にして、轉注、假借は、使用法なり。今その義を釋し、且例を示すこと左の如し。

象形 象形は、物の形象に象れるものにて、圖畫とその性質を同じくす。されば目前に現るゝ有形の物體をあらはす字は、象形によりしもの多し。かく象形は製字の基本なれども、今日の漢字全體より見れば、その字數は多からず。蓋し、一たび象形の字を作れば、之を本として他の指事、會意、諧聲等の法により



て、無数の文字を作ることを得ればなり。

例、日 月 山 木 魚 馬

指事 指事は、事物の性質を指示するものなり。有形の物體にして、その形の象ることを得るものは、之によりて文字を作れりと雖も、その形の象るべからざるものは、或は直ちにその事物の性質を指示し、或は象形によりて點畫を増減し、以てその性質を指示せるものなり。

例、一 二 末 本 反 夕

會意 會意は、各字の既に形を成せるものに就きて、二字若しくは二字以上を連ね、その意を會合して義

を取るものなり。中にはその畫を省けるものもあり。

例、信 林 轟 東 孝 義

諧聲 諧聲は、兩字を合して、半ばは義を主とし、半ばは聲を主とするものなり。蓋し、諧聲は六書の主要なるものにして、文字増殖の法に於て尤も便利なるものなれば、漢字十中の八九は、この法によりて構造せられたるものなり。

例、江 雞 齒 蓮 圃 問

以上の四法によりて文字を作りたれども、限りある文字を以て限りなき事物を記すること能はず。是

圃



伸  
展轉

に於て更に轉注假借の二法によりて、文字の運用を廣むることあり。

轉注 轉注とは、其の義を引伸展轉して、他の近似せる意味に注ぎて流用するものなり。その中、義を轉ずるに従ひて、その音を異にするものあり、義を轉じてその音を異にせざるものあり。例へば、音樂の樂の義を轉じて「たのしむ」の義として、其の音を「らく」とし、善惡の惡の義を轉じて「にくむ」の意とし、其の音を「を」とするが如きは前者なり。號令の令の義を轉じて「縣令」と用ひ、長幼の長の義を轉じて「村長」と用ふるが如きは後者なり。

拘  
俎豆

假借 假借文は、字の本義に拘らず、その音を借りて他の意義に用ふるものなり。例へば「俎豆」の「豆」を假借して、「菽」の義とし、「皮革」の「革」を假借して、「更む」の義とするが如きはこれなり。其の他、外國語の音譯に於ける、比丘・菩薩及び成吉思汗・鐵木眞の類も、亦この法に依るものなり。

(漢字要覽)

### 二六 奮戦後の赤城を訪ふ

余は赤城を訪はんと欲し、二三の年少士官と共に、小蒸氣船に乗じて至る。

舷門を入りて四顧すれば、大苦戦の跡歴々として、一



慄然  
穿つ  
彈痕

見人をして慄然たらしむ。雨の如く霰の如く撃ちかけられたる彈丸に、三十餘の大孔を穿たれて、大櫓折れ、鐵板裂け、彈痕さながら石榴の如し。これらよりも尙余をして悲壯を感じしめしものは、毛布に包まれ、今や將に陸上に運ばれんとして甲板に竝べられたる、戦死者十餘名の屍にぞある。想ひ見れば一昨日の海戦、致遠靖遠來遠の三大艦に圍み撃たれし時、血雨の中に立ちて、五尺の體を君に捧げ、千載不朽の名譽を残して斃れたる此の人々の最期は、いかに勇ましかりけん。

捧ぐ  
朽

余は暫時茫然としてありけるに、誰とも知らず軽く

肩を打てるものあり。顧みれば、右手は白布もて胸の邊に鈎られ、顔面半ばは繃帶に覆はれたる航海長の、わが背後に立てるなりき。

「生残りしか。」

余は思はずもかく叫びぬ。彼は單に「お」と答へて、左手もて余が手をしかと握れり。余は尙言葉を續けんとすれど、胸塞がりて言ふ事能はざれば、たゞ握りし彼の手を打振りて、默然たるのみ。彼も亦默然たり。見交す眼中共に涙浮びぬ。

「負傷は如何。」

余は辛うじて己が心を勵ましつゝ、再び問ひかけた

默然



り。

「安んぜよ。彈丸破裂の際、木片に撃たれて、右眼と右腕とに微傷を受けしのみ。」

彼も亦平常の沈着なる語調にかへり、余を舳はなの方に導けり。兩分隊長、航海士も來りて、互にその無事なりしを祝す。

柩  
愁然

やがて余は艦長の柩前に再拜して、その雄魂を弔ひ、それより艦橋に赴きぬ。航海長愁然として曰く、

酬

「聞けよ足下。黄海戰酬なる時、我が艦重圍の中に陥り、辛くも一方の血路を開きて脱るゝや、致遠靖遠來遠の三艦追撃すること最も急にして、われは

逡巡

怯弱

狙ふ

殆ど萬死を期せり。此の時既に一番分隊長は、負傷して艦橋に倒れ、彈丸縱横に飛んで、兵士これが爲に死するもの數人、危機はいよく、迫り來れり。艦長は余と並び立ちて艦橋上にあり、海圖を開き、冷然として來遠がわが砲彈に恐れて逡巡するを眺めつゝ、いへるやう、怯弱何ぞかくの如き。我が艦にして今少しく大ならば、直ちに彼等を捕獲せんものを」と。これ我が敬愛する艦長が、この世に遺しし最後の一言なり。敵は實に數百米突の近距離にあり。狙ひ放ちし彈丸過たず、其所なる砲架に中りて破裂し、一大彈片飛んで艦長の半頭を



塊

感慨

微塵に碎けり。見給へ、その海圖及び甲板の血痕は、これ陛下に捧げし艦長が肉塊の遺物ぞや。かく語り續けて、感慨禁ずる能はざるが如く、彼はしばし言を斷ちぬ。やうくはふり落つる熱涙を拂ひつゝ、

候補

嗚呼

「艦長のみか、前檣樓に在りて、距離の測定に従事せし橋口候補生も、來遠八百」と叫びもあへず、飛びくる敵弾に身を寸斷せられ、血はさつと甲板に降り、大腸、小腸、檣を傳うて落つ。嗚呼、艦長死し、一番分隊長負傷して、一艦の運命今や余が雙肩に懸る。余は決心せり、我が艦免れ難し、よし、一轉して、我が

託す

衝突角もて追來る敵艦の中腹を貫き、共に沈まんのみと。進みて傳話管に口を寄せ、按針手に「取舵」と令せんとする一刹那、余は卒然として我が決心の非なるを悟りぬ。嗚呼、余が一身輕しと雖も、赤城及び陛下の赤子數十の命は實に重し。飽くまでも免れざるべからずと。傳話管を離れんとする折しも、頭上近く飛んで前面に跳ねし敵弾の餘勢に打たれて、余はどろとその場に轉倒せり。二番分隊長、後砲臺を航海士に託して驅け來り、代つて戦を督しつゝ、如何に」と叫び問ふ。その大聲に勵まされて立上りしが、飛散る木片に中りて、二箇



所の傷を負ひぬ。

余は覺えず手に汗を握る。

時に同伴の一少尉來りて歸艦を促す。乃ち航海長

と握手し、再會を約して舷門を出づ。

（海戰日録に據る）

二七 笑話四則

麤相

麤相

「こりや與助よ、急な用があるから、萬屋萬兵衛殿へ使  
にいつてこい。」といひ付けながら筆をとり、手紙をか  
くうちに、「かしこまりました。」と言捨ててかけ出す。  
さてもあはる者と頭をかいてゐるうちに、與助は立

歸り、「はい御使にいつてまわりました。」たはけもの  
めが、手紙をも持たずに先へいつて、まあ何というて  
來た。「はい、いや何とも申しません。」だまつて歸つ  
たか。「いえ、く、仕合とよい所へまわりました。萬  
兵衛様はおるすでござりました。」

からかさ

傘を張りならひ、七八本はり上げしが、油引いてから  
一本もすぼまらず。これはつまらぬと、むりに疊め  
ば、ばりぐとさく。どうしたものぢやと、こまりし  
が、折からの夕立。しや、よい思ひ付があると、傘を開  
いたまゝ、辻へ持つていで、「それ廉い負けた、まけた。」と

廉し



南無三

賣りかけしに、俄雨のことなれば、大勢集り、うばひあふ様にかうてゆく。こりやうれしやと内へ走りかへり、思付をやつて、傘を残らず賣つて來た。といへば、隣の人が「それはよかつた。いくらにうつたぞ。」南無三、あまりいそいで錢をば取らずにやつた。

居風呂

田舎からとまり客のあるに、居風呂をたてていれられしに、此の客、風呂に入りて、半時ばかり音もなし。亭主きづかひに思へど、はやくあがられよともいひにく、湯殿の口にたゞずみて、ゆるりとお入りなされ。といへば、返事するをき、まづおちつきて居るに、

礫

晦日 朔日

待てどくらせど音もなし。又もふしんに思ひ、再び「ゆるりとお入りなされ。」といへば、返事の聲あり。やや久しくして、蝦の如く赤くなりて風呂よりあがる。つれの客見て、「いかり長湯をめさせられた。」といへば、「はて御馳走ではあらうが、湯を強ひられるもせつないもんだ。」

礫文字

手紙をひらき見れば「柳日を借用申度。」との文言。さあ、これは讀めぬと、二三人が相談して、「大方平生あて字を書くやつぢやによつて、是は朔日のたちであらう。」と讀んで見てもよめぬ故、先方に聞きにやれば、「晦



日のごりの字ぢや。柳ごりをかりたい。  
(落語選)

大正讀本 卷一終

註釋 (卷一)

我が國の人の生死の年は年號で出し、西洋人には耶穌紀元を用ひ、支那人はおほよそに何々の世の人と記した。

- アラーネ王 || テセウスの父、エゲウスと云ふ。
- 阿部忠秋 || 徳川三代將軍家光に仕へ、老中の役まで上る。延寶三年に死んだ。年七十四。
- アリストテレス || ギリシヤの大學者 (紀元前三八四—三二二)
- アルトルフ || 瑞西國ウリ州の首府。こゝに一八六一年に建てられたウイルヘルム、テルの像がある。
- アレクサンドル大王 || マケドニア王フィリポの子。ギリシヤ、エジプト、ペルシヤ、印度等を征服した大英雄 (紀元前三五六—三二三)
- ウイルヘルム、テル || 十四世紀の初頃、瑞西が奥太利に困められた時、奮然起つて敵方の奉行を殺し、瑞西の獨立を全からしめた人。
- ウオシントン政府 || ウオシントン府にある合衆國政府のこと。
- ウラー || 我が國で萬歳といふに同じ。

註釋 (卷一)

- エギナ || アテーネとトロエゼンとの間に在る海、エゲウスが此の海に投じたので此の名がついた。
- 大河内金兵衛元綱 || 三河國寺津の領主。
- 艦長 || 海軍少佐坂本八郎太。
- キャプスタン、バー || 錨を卷上げる機械の横木。英語、我が國船員の常に用ふる言葉。
- クラブキャリアー || 棒を持ち旅人を打殺す賊。
- 火龍 || 希臘の昔話中にある怪物。
- ゲスレル || 奥太利のハプスブルグ家から奉行として瑞西へ派遣されて居た人。
- シニス || 森林中に住める賊の名。
- シルレル || 有名な獨逸の詩人 (一七五九—一八一五)
- 杉野兵曹長 || 名は孫七、三重縣の人。廣瀬中佐の部下で、中佐と共に戦死した。
- スワロフ || 露西亞の戦艦。排水量一三五一六噸。ロジエストウエンスキー提督の旗艦であつたが、日本海を戦の際、二十七日の晝戦に、沖の島北方で沈没した。乗員約九百五十名の中、司令官以下約二十名我が軍の虜となり、他は皆戦死。



- 台徳院 徳川二代將軍秀忠のこと。
- 大猷院 徳川三代將軍家光のこと。
- 竹千代 三代將軍家光の幼名。
- 鎖 ぐさりのこと。チェーンは英語、我が國船員の常によぶる言葉。
- テセウス ギリシヤの昔話中の人物、アテーネ王エゲウスの子。ギリシヤ人の理想的英雄。
- トロエゼン エギナ海の南にある都市。
- ナイヤガラ 瀑布 北米合衆國エリー湖とオンタリオ湖との間にある世界一の大瀑布。
- 水先魚 魚群の先に立つて案内をする魚。
- バインベンダー 松の木を撓める人の意。樹を引撓めて人を殺すから附けた名。
- バーク 小帆船のこと。
- バルチック艦隊 露國が送つた第二、三大太平洋艦隊を合はせ云ふので、戦艦八隻、装甲巡洋艦三隻、装甲海防艦三隻、巡洋艦六隻、驅逐艦及び特務船各九隻、計三十八隻から成る。ロジエストウエンスキー中將が其の司令官。
- 廣瀬中佐 名は武夫、大分縣の人。日露戦争の時、

- 旅順口閉塞に行つて、二回目に花々しい戦死を遂げた。年三十七。
- グレイヌイ 露國の驅逐艦。排水量三五〇噸。二十八日、汽鐘破損のため沈んだ。乗員七十餘名我が軍の虜となる。
- 鈎 釣針のこと。フックは英語で、船員の常によぶる言葉。
- 滑車 重い物を引上げるに用ふる車。プロックは其の英語、我が國船員の常によぶる言葉。
- ボースン पोर्टスウエーンとも云ふ、水夫長の英語、我が國でも船員の常によぶる言葉。
- 端艇吊柱 पोर्टかけ、पोर्टを吊り下げる柱。पोर्टダヴィットは英語、我が國でも船員の常によぶる言葉。
- ホメロス 有名なギリシヤの詩人、紀元前八五〇年頃の人といふ。
- マケドニア王 フイリポ アレクサンドル大王の父。マケドニアは今の土耳其帝國の邊に廣がつた大きな昔の王國。
- 正綱 家康、秀忠、家光の三代に仕へた人。

- 松平信綱 川越の城主。徳川三代將軍家光の重臣。伊豆守で智者であつたから、智慧伊豆と呼ばれた。寛文二年に死んだ。年六十七。
- 馬尼刺 呂宋にあるフィリッピン群島の首府。煙草の産地。人口二四四七三二。
- 明曆の火災 徳川四代將軍家綱の時、明曆三年江戸に起つた大火。死者十萬八千餘人といふ。
- 由井正雪 兵法家。慶安四年駿府で亂を起さうとして幕吏に圍まれ、自殺した。
- 檣梯 檣から諸方へ張つてある綱。リギンは英語、我が國船員の常によぶる言葉。
- 呂宗島 フィリッピン群島中の最大島。マニラ市は此の島にある。
- 手擦 レールは英語、我が國でも船員の常によぶる言葉。
- ロジエストウエンスキー バルチック艦隊を率ゐて來て、日本海を戦に大敗して虜となつた。露國海軍中將。
- 綱 rops は英語で、我が國で船員の常によぶる言葉。



大正元年十月二十八日  
 大正二年十一月十八日  
 大正二年一月廿一日  
 發行  
 訂正  
 訂正再版發行

大正讀本奧附

定價  
 卷一 金貳拾七錢  
 卷二 金貳拾八錢  
 卷三 金貳拾六錢  
 卷四 金貳拾六錢  
 卷五 金貳拾六錢  
 卷六 金貳拾四錢  
 卷七 金貳拾五錢  
 卷八 金貳拾五錢  
 卷九 金貳拾六錢  
 卷十 金貳拾五錢

著者

藤村

發行兼印刷者

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地  
 大日本圖書株式會社

右代表者

專務取締役 宮川保全



發行所

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地  
 大日本圖書株式會社

郵便振替貯金口座東京二二九番

各府縣下 特約販賣所



各府縣下特約販賣所

**東京府** 丸善・青野・内田・三友・文林堂・大倉・水野・林平・杉本・文星堂・中西屋・文會堂・東京堂・二松堂・勉強堂・有隣堂・良明堂・東海堂・松邑・十字屋・北隆館・森江  
**神奈川縣** 柳正堂  
**愛知縣** 川瀨・永東  
**長野縣** 西澤・朝陽館・水琴堂・日新堂・盛文堂  
**群馬縣** 弘集堂・勉強堂  
**靜岡縣** 吉見・三原屋・大石・谷島屋  
**山梨縣** 多田屋  
**茨城縣** 川又・寺田・明文堂  
**栃木縣** 煥乎堂分舖・青木  
**福島縣** 磐岳堂  
**宮城縣** 英華堂・藤崎・金港堂  
**千葉縣** 佐藤・文明堂  
**山形縣** 牧野・八文字屋・盛文堂  
**秋田縣** 曙堂・藤島・東海林  
**青森縣** 今泉・今泉支店・青霞堂  
**北海道** 川南・富貴堂・魁文舍・一二堂  
**新潟縣** 北光社・目黒・覺張・高桑・萬松堂・萬松堂支店・野島  
**富山縣** 支店  
**石川縣** 中田・清明堂・學海堂  
**福井縣** 安屋・岩田  
**大阪府** 松村・三宅・柳原・吉岡・今井  
**京都府** 松田・若林  
**兵庫縣** 熊谷・中井・福浦・竹内  
**奈良縣** 木原  
**和歌山縣** 宇都宮  
**廣島縣** 品川  
**岡山縣** 廣田  
**山口縣** 山陽書籍株式會社  
**德島縣** 積善館・芸香堂  
**香取縣** 久松堂・徳岡・今井  
**鳥取縣** 川岡  
**山口縣** 超世館・日新堂・合英堂  
**岡山縣** 開文舍・開益堂  
**廣島縣** 靜壽堂  
**愛媛縣** 向井・土肥  
**高知縣** 富士越  
**福岡縣** 平安堂  
**長崎縣** 五郎川  
**熊本縣** 進堂  
**鹿兒島縣** 平井・牧川  
**宮崎縣** 金文堂・佐野・積善館・博文社  
**鹿児島縣** 長崎  
**大分縣** 甲斐・中岡・梅津  
**佐賀縣** 吉田・金光堂  
**熊本縣** 小澤  
**鹿兒島縣** 新高堂

大日本圖書株式會社

(大正元年十月調)



